

社 会

(地理的分野)

発行者			教科書の記号・番号	判型 総ページ数	検定済年
番号	名称	略称			
2	東京書籍	東 書◆	地理 002-72	A B 294	令和6年
17	教育出版	教 出◆	地理 017-72	A B 310	
46	帝国書院	帝 国◆	地理 046-72	A B 310	
116	日本文教出版	日 文◆	地理 116-72	A B 318	

※「発行者 略称」欄にある◆は、「学習者用デジタル教科書」（学校教育法第34条第2項に規定する教材）の発行予定があることを示しています。

1 調査の対象となる教科書の冊数と発行者

冊数	発行者の略称
4冊	東書、教出、帝国、日文

2 学習指導要領における教科・分野の目標等

【社会科の目標】

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情、国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

【地理的分野の目標】

社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の国土及び世界の諸地域に関して、地域の諸事象や地域的特色を理解するとともに、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 日本や世界の地域に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとする大切さについての自覚などを深める。

【参考：中学校学習指導要領解説 社会編「第1章 総説 2 社会科改訂の趣旨及び要点」から抜粋】

(2) 改訂の要点

〔地理的分野〕

地理的分野における改訂の要点は、主に次の5点である。

ア 世界と日本の地域構成に関わる内容構成の見直し

「世界と日本の地域構成」については、従前の「世界の様々な地域」、「日本の様々な地域」の二つの大項目からなる内容構成を見直し、両大項目の最初に置かれた「世界の地域構成」、「日本の地域構成」を統合して新たな大項目を設け、それを地理的分野の学習の冒頭

に位置付けることとした。

この「世界と日本の地域構成」を学習の冒頭に位置付けたのは、世界及び日本の地域構成に関する学習を関連付け、世界と日本の地理的認識の座標軸を形成することを意図したものである。また、そこでの学習で小学校の地理的な学習内容を振り返るとともに、地図の読図や作図などの地理的技術の基本を身に付けることによって、地理学習の楽しさや有用性を確認することができ、その後の「世界の様々な地域」、「日本の様々な地域」の学習を円滑に展開し、地理的技術の育成の一層の充実を達成するよう意図したものである。

イ 地域調査に関わる内容構成の見直し

地域調査については、従前の世界の様々な地域又は国を対象とする「世界の様々な地域の調査」、生徒の生活舞台を対象とする「身近な地域の調査」という、対象地域によって異なる二つの中項目からなる内容構成を見直し、生徒の生活舞台を主要な対象地域とした、観察や野外調査、文献調査などの実施方法を学ぶ「地域調査の手法」と、地域の将来像を構想する「地域の在り方」の二つの中項目に分け、再構成することとした。

このことは、対象地域のスケールの違いによって項目を分けるのではなく、技能の習得を中心とする学習と、地域の地理的な課題の解決を中心とする学習との目的の違いによって項目を分けることで、学習のねらいを明確にし、その確実な実施を意図したものである。

ウ 世界の諸地域学習における地球的課題の視点の導入

今回の改訂では、中央教育審議会答申の中で、「持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育てていくことが求められ」ている。また、学校教育法の義務教育の目標の中に示された、「進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」については、その重要性はますます高まってきている。

そこで、グローバル化が引き続き進展し、また環境問題等の地球的課題が一層深刻化する現状においては、世界の諸地域の多様性に関わる基礎的・基本的な知識を身に付け、世界全体の地理的認識を養うとともに、世界各地で見られる地球的課題について地域性を踏まえて適切に捉えることが大切であることから、地球的課題の視点を「世界の諸地域」における追究の視点として位置付けることを意図したものである。

エ 日本の諸地域学習における考察の仕方の柔軟化

中学校社会科の地理的分野学習の中心であった日本の諸地域に関する学習は、平成20年改訂によって、日本全体について任意に地域区分した上で、各地域の特色ある事象を中核に、それを他の事象と有機的に関連付けて地域的特色を捉えることとなった。今回もこの趣旨を継承し、項目ごとに羅列的な扱いに陥ることのないよう、また、学習する地域に関する事実的な知識を覚えることのみならず主眼が置かれることのないよう、考察の仕方に重点を置いた「日本の諸地域」学習を引き継ぐこととした。

その際、平成20年改訂では、指定された七つの考察の仕方に対して、七地方区分された日本各地域を当てはめるという組合せが一般的であったが、このたびは適切に地域区分された日本の各地域を前提に、その地域的な特色を捉えるのに適切な考察の仕方を、指定された四つの考察の仕方、あるいは必要に応じて中核となる事象を設定する考察の仕方を、適宜選択して組み合わせて結び付けるようにした。このことによって、地域の特色を明らかにするための中核となる事象を、従前よりも柔軟に設定することができ、諸地域の単なる地誌的な知識の習得に偏重した学習に陥ることなく、より動態地誌的な考え方の趣旨に沿った展開ができるよう意図したものである。

オ 日本の様々な地域の学習における防災学習の重視

平成20年改訂以降、未曾有の災害である東日本大震災を経て、なお継続する地震被害、さらに全国各地で生起する台風や集中豪雨等による河川の決壊、土砂崩れなど、頻発する自然災害に対応した人々の暮らしの在り方を考えることは、我が国で生活する全ての人々にとつ

て欠くことのできない「生きる力」である。

そこで、大項目「日本の様々な地域」にあつては、それを構成する四つの中項目を通して、我が国の自然災害や防災の実態などを踏まえた学習が可能となるように、適宜、自然災害やそこでの防災の事例が取り上げられるような構成としている。例えば、「日本の地域的特色と地域区分」では、その前提となる日本全体としての自然環境、自然災害、防災の取組の概観を、「日本の諸地域」では地域レベルでのそれらの具体的な特色を、さらに「地域調査の手法」、「地域の在り方」では、調査手法、地域構想のいずれに視点を置くかの違いはあるものの、いずれの学習においても事例対象として生徒の生活圏における自然災害や防災を取り上げ、学習を深めることが可能となるよう意図したものである。

3 教科書の調査研究

(1) 内容

ア 調査研究の総括表（調査結果は「別紙1」）

調査研究項目（調査研究の対象）	対象の根拠（目標等）	数値データの単位
a 「a 世界と日本の地域構成」内容ごとのページ数と割合	地理・目標(1) 分野の改訂の要点 ア	ページ数、%
b 「b 世界の様々な地域」内容ごとのページ数と割合	地理・目標(1)	ページ数、%
c 「c 日本の様々な地域」内容ごとのページ数と割合	地理・目標(1) 分野の改訂の要点 イ	ページ数、%
d 「b-イ 世界の諸地域」各州において取り上げている州内の国の数	地理・目標(1) 分野の改訂の要点 ウ	箇所
e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域の数	地理・目標(3) 分野の改訂の要点 イ	箇所
f 東京に関する地理的事象を取り上げている箇所数	地理・目標(3)	箇所
g 発展的な内容を取り上げている箇所数	中学校学習指導要領総則	箇所

イ 調査項目の具体的な内容（調査結果は「別紙2」）

① 調査項目の具体的な内容の対象とした事項

調査研究事項のb～gとの関連で、次の事項について具体的に調査研究する。

b 「b 世界の様々な地域」における「イ 世界の諸地域」で扱っている主題
(別紙2-1)

c 「c 日本の様々な地域」における「ウ 日本の諸地域」で扱っている考察の仕方
(別紙2-2)

d 「b-イ 世界の諸地域」で取り上げている州別国名 (別紙2-3)

e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域名と内容 (別紙2-4)

f 東京に関して取り上げている地理的事象 (別紙2-5)

g 発展的な内容を取り上げている箇所数

<調査の結果、gについては記載のないことを確認した。>

<その他>

*1 我が国の位置と領土の扱い（北方領土、竹島、尖閣諸島、その他（領土の範囲等））
(別紙2-6)

*2 国旗・国歌の扱い (別紙2-7)

*3 北朝鮮による拉致問題の扱い

<調査の結果、*3については記載のないことを確認した。>

- * 4 防災や自然災害の扱い（別紙 2-8）
- * 5 脱炭素化に関する扱い（別紙 2-9）
- * 6 持続可能な社会づくりの扱い（別紙 2-10）
- * 7 障害者理解に関する扱い（別紙 2-11）
- * 8 オリンピック・パラリンピックの扱い（別紙 2-12）
- * 9 固定的な性別役割分担意識に関する記述等（別紙 2-13）

② 調査対象事項を設定した理由等

- ・ 地理的分野の学習では、社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することをねらいとしている。概括的な調査研究で取り上げた地域や事例・事象等のうち、学習の対象となった地域やその学習内容・方法を調査することにより、各社の方針を明確にする。（a、b、c、d、e）
- ・ 教育基本法と学校教育法においては、共に「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が明記されている。地理的分野の学習において、「地域に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度」、「地域の実態や課題解決のための取組」の理解、地域で見られる「地理的な課題について多面的・多角的に考察、構想し、表現する」力の育成を重視するため、地域の在り方で取り上げている地域名と内容や東京に関して取り上げている地理的事象を調査する。（e、f）
- ・ 発展的な内容については、中学校学習指導要領 第1章 総則「第2 教育課程の編成 3 教育課程の編成における共通事項 (1) 内容等の取扱い イ」において、「学校において特に必要がある場合には、第2章以下に示していない内容を加えて指導することができる。」と示されている。また、「(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項 イ」では、「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること」と示されている。これらのことから、発展的な内容の扱いの有無、取り上げている内容の具体的な学習の内容について調査する。（g）
- ・ 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについては、中学校学習指導要領 第2章 第2節 社会 3 内容の取扱いでは、「領域の範囲や変化とその特色」において、「我が国の海洋国家としての特色を取り上げるとともに、竹島や北方領土が我が国の固有の領土であることなど、我が国の領域をめぐる問題も取り上げるようにすること。その際、尖閣諸島については我が国の固有の領土であり、領土問題は存在しないことも扱うこと。」とあることから、我が国の領域をめぐる問題について正しく理解できるようにするため、北方領土、竹島、尖閣諸島に関する記述の概要を調査する。（*1）
- ・ 国旗・国歌については、学習指導要領に基づき、国旗・国歌に対する正しい認識をもたせ、それらを尊重する態度を育てることが大切であることから、その扱いについて調査する。（*2）
- ・ 東京都教育委員会教育目標の基本方針1「人権尊重の精神と社会貢献の精神の育成」を掲げ人権教育を推進してきた観点から、児童・生徒が人権尊重の理念を正しく理解できるようにするため、北朝鮮による拉致問題の扱いについて調査する。（*3）
- ・ 東京都では、自然災害における被害を最小化し、首都機能の迅速な復旧を図る総合的なリスクマネジメント方策の確立が喫緊の課題であり、防災教育の普及等により地域の防災力の向上が重要であることから、防災や自然災害における関係機関の役割等について考察させることを通じて、これらの問題を正しく理解できるようにするため、防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱いについて調査する。（*4）

- ・ 学習指導要領に基づき、環境にかかる諸問題を考察させることを通して、これらの問題を正しく理解できるようにするため、脱炭素化に関する扱いについて調査する。（＊５）
- ・ 生徒には、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される。学習指導要領に基づき、正しい理解ができるように、持続可能な社会づくりの扱いについて調査する。（＊６）
- ・ 東京都教育委員会の基本方針１である「人権尊重の精神」と「社会貢献の精神」の育成を踏まえ、障害のある人も障害のない人もともに尊重し合いながら活躍できる社会、共生社会の実現を目指す上で、障害のある幼児・児童・生徒に対する理解を深められるようにするため、その扱いについて調査する。（＊７）
- ・ 東京都教育委員会教育目標の基本方針２・３に基づき、文化・スポーツに親しみ、国際社会に貢献できる日本人を育成するという観点から、オリンピック・パラリンピックの扱いについて調査する。（＊８）
- ・ 東京都教育委員会の基本方針１及び東京都の男女平等参画推進の施策を踏まえ、固定的な性別役割分担意識の解消や、「無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）」に気付いて言動等を見直していくなど、男女の平等を重んずる態度を養うことができるよう、その扱いについて調査する。（＊９）

③ 調査研究の方法

- b 「世界の諸地域」で扱っている主題を州ごとに記述する。
- c 「日本の諸地域」で扱っている考察の仕方を地域ごとに記述する。
- d 「世界の諸地域」で取り上げている国名を州ごとに整理する。
- e 「地域の在り方」において取り上げている地域名と内容について整理する。
- f 東京に関する地理的事象を取り上げている項目を整理する。

<その他>

- * 1 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。
- * 2 国旗・国歌について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 3 北朝鮮による拉致問題の扱いについて取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 4 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱いについて取り上げている項目を調査する。
- * 5 脱炭素化について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 6 持続可能な社会づくりについて取り上げている項目を調査する。
- * 7 障害者理解について取り上げている記述の概要を調査する。
- * 8 オリンピック・パラリンピックについて取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 9 固定的な性別役割分担意識に関する記述等を調査する。

(2) 構成上の工夫（調査結果は「別紙３」）

以下の観点について、箇条書きで記述する。

- ア 冊子の構成
- イ 学習過程
- ウ 学習活動
- エ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫
- オ ユニバーサルデザインの視点
- カ デジタルコンテンツの扱い

「別紙1」 【(1)内容 ア 調査研究の総括表】(中学校 社会 地理的分野)

項目	全体のページ数、内容ごとのページ数と割合															d 「b-イ 世界の諸地域」各州において取り上げている州内の国の数							e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域の数	f 東京に関する地理的事象を取り上げている箇所数	g 発展的な内容を取り上げている箇所数
	a 「世界と日本の地域構成」内容ごとのページ数と割合(上段:ページ数、下段:%)			b 「世界の様々な地域」内容ごとのページ数と割合			c 「日本の様々な地域」内容ごとのページ数と割合					成 a 「世界と日本の地域構成」	b 「世界の様々な地域」	c 「日本の様々な地域」	計	ア アジア	オ オセアニア	ヨ ヨーロッパ	ア アフリカ	北 北アメリカ	南 南アメリカ	計			
	ア 世界の地域構成	イ 日本の地域構成	計	ア 生活世界の環境の人々の	イ 世界の諸地域	計	ア 地域調査の手法	イ と日本の地域的特色	ウ 日本の諸地域	エ 地域の在り方	計														
東書	12 50.0%	12 50.0%	24 100.0%	24 21.8%	86 78.2%	110 100.0%	12 8.8%	27 19.9%	86 63.2%	11 8.1%	136 100.0%	24 8.9%	110 40.7%	136 50.4%	270 100.0%	33	6	34	34	8	10	125	18	90	0
教出	10 55.6%	8 44.4%	18 100.0%	17 16.2%	88 83.8%	105 100.0%	14 8.9%	26 16.6%	107 68.2%	10 6.4%	157 100.0%	18 6.4%	105 37.5%	157 56.1%	280 100.0%	47	15	44	55	23	12	196	10	89	0
帝国	12 50.0%	12 50.0%	24 100.0%	19 18.6%	83 81.4%	102 100.0%	12 7.3%	26 15.8%	116 70.3%	11 6.7%	165 100.0%	24 8.2%	103 35.3%	165 56.5%	292 100.0%	35	5	34	32	10	9	125	3	111	0
日文	10 50.0%	10 50.0%	20 100.0%	18 17.3%	86 82.7%	104 100.0%	14 8.6%	24 14.7%	114 69.9%	11 6.7%	163 100.0%	20 7.0%	104 36.2%	163 56.8%	287 100.0%	42	6	35	25	5	10	123	14	88	0
平均値	11.0	10.5	21.5	19.5	85.8	105.3	13.0	25.8	105.8	10.8	155.3	21.5	105.5	155.3	282.3	39.3	8.0	36.8	36.5	11.5	10.3	142.3	11.3	94.5	0.0

a 「世界と日本の地域構成」内容ごとのページ数と割合については、各社の教科書の目次から各項目のページ数を算出した。
 b 「世界の様々な地域」内容ごとのページ数と割合については、各社の教科書の目次から各項目のページ数を算出した。
 c 「日本の様々な地域」内容ごとのページ数と割合については、各社の教科書の目次から各項目のページ数を算出した。
 d 「b-イ 世界の諸地域」で取り上げている州内の国の数については、各社の該当項目で取り上げているその州内の国の数を数えた。
 e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域の数は、各社の該当項目で取り上げている「地域の在り方」の事例地の数を数えた。
 f 「東京に関する地理的事象を取り上げている箇所数」は、各社の教科書で東京に関わる地理的事象を取り上げている箇所数を数えた。
 g 「発展的な内容を取り上げている箇所数」は、発展的な内容を取り上げている箇所数を数えた。
 ※ 集計について、小数第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない項目がある。

「別紙2-1」 【 (1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 「b 世界の様々な地域」における「イ 世界の諸地域」で扱っている主題 】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	アジア	オセアニア	ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	南アメリカ
東 書	経済発展が地域に与える影響	他地域との結びつき	国家間の統合が地域に与える影響	国際支援からの自立	移民が地域に与える影響	開発と環境保全の課題
教 出	持続可能な社会	歴史的な背景	強まる結びつき	現状と、抱える課題の解決に向けた動き	進んだ産業	開発やそれにともなう生活の変化
帝 国	急速な経済成長	他地域との関係	国どうしの結びつきの強まり	特定の産物に頼る経済	巨大な産業	農地や鉱山の開発
日 文	人口や経済発展	多文化社会	国境をこえた統合	自立のための開発と国際協力	世界に影響をあたえる産業	開発と環境保全

「別紙2-2」 【 (1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 ◦ 「c 日本 の 様々な地域」における 「ウ 日本 の 諸地域」で扱っている考察の仕方 】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	ア 北海道地方	イ 東北地方	ウ 関東地方	エ 中部地方	オ 近畿地方	カ 中国・四国地方	キ 九州地方
東 書	自然環境	生活・文化	交通や通信	産業	人口や都市・村落	交通や通信	自然環境
教 出	自然環境と関連する産業の変化	地域の伝統文化と産業の変化	交通・通信	産業	歴史	人口集中や人口減少	自然環境とその保全
帝 国	自然環境	生活・文化	人口や都市・村落	産業	環境保全	交通や通信	自然環境
日 文	自然環境	持続可能な社会づくり	人口や都市・村落	産業	歴史的背景	交通・通信	自然環境

考察の仕方を記述 (自然環境、人口や都市・村落、産業、交通や通信、その他の事象)

「別紙2-3」 【 (1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 d 「b-イ 世界の諸地域」で取り上げている州別国名 】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	アジア	オセアニア	ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	南アメリカ				
東 書	アゼルバイジャン アフガニスタン アラブ首長国連邦 イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カザフスタン カタール 韓国 カンボジア 北朝鮮 クウェート サウジアラビア シリア シンガポール スリランカ タイ 中国 トルクメニスタン トルコ 日本 ネパール	オーストラリア サモア ツバル ニュージーランド バプアニューギニア フィジー共和国	アイスランド アイルランド アルバニア イギリス イタリア ウクライナ エストニア オーストリア オランダ キプロス ギリシャ クロアチア スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー ハンガリー フィンランド フランス ブルガリア	ベルギー ポーランド ポルトガル マルタ ラトビア リトアニア ルーマニア ルクセンブルク ロシア ハンガリー フィンランド フランス ブルガリア	アルジェリア アンゴラ ウガンダ エジプト エチオピア エリトリア ガーナ ガボン ギニア ケニア コートジボワール コンゴ共和国 コンゴ民主共和国 ザンビア ジンバブエ スーダン タンザニア チャド チュニジア ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ボツワナ マダガスカル	南アフリカ共和国 南スーダン マリ モーリタニア モロッコ リビア リベリア ルワンダ	アメリカ合衆国 カナダ キューバ グアテマラ コロンビア チリ パラグアイ ブラジル ベネズエラ ペルー ボリビア			
教 出	アゼルバイジャン アフガニスタン アラブ首長国連邦 アルメニア イエメン イスラエル イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カザフスタン カタール 大韓民国 カンボジア キプロス キルギス クウェート サウジアラビア ジョージア シリア シンガポール スリランカ タイ	タジキスタン 中華人民共和国 朝鮮民主主義人民共和国 トルクメニスタン トルコ 日本 ネパール バーレーン パキスタン バングラデシュ 東ティモール フィリピン ブータン ブルネイ ベトナム マレーシア ミャンマー モルディブ モンゴル ヨルダン ラオス レバノン	オーストラリア キリバス クック諸島 サモア ソロモン諸島 ツバル トンガ ナウル ニュージーランド バヌアツ バプアニューギニア パラオ フィジー マーシャル諸島 ミクロネシア連邦	アイスランド アイルランド アルバニア イギリス イタリア ウクライナ エストニア オーストリア オランダ 北マケドニア ギリシャ クロアチア コソボ サンマリノ スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア セルビア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー バチカン市国	ハンガリー フィンランド フランス ブルガリア ベラルーシ ベルギー ポーランド ボスニア・ヘルツェゴビナ ポルトガル マルタ モナコ モルドバ モンテネグロ ラトビア リトアニア リヒテンシュタイン ルーマニア ルクセンブルク ロシア連邦	アルジェリア アンゴラ ウガンダ エジプト エスワティニ エチオピア エリトリア ガーナ ガーボベルデ ガボン カメルーン ガンビア ギニア ギニアビサウ ケニア コートジボワール コモロ コンゴ共和国 コンゴ民主共和国 サントメ・プリンシペ ザンビア シエラレオネ ジブチ ジンバブエ ガーボベルデ	スーダン セーシェル 赤道ギニア セネガル ソマリア タンザニア チャド 中央アフリカ チュニジア トーゴ ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ブルンジ ベナン ボツワナ マダガスカル マラウイ マリ 南アフリカ共和国 南スーダン共和国 モーリシャス モーリタニア モザンビーク	モロッコ リビア リベリア ルワンダ レソト	アメリカ合衆国 アンティグア・バーブーダ エルサルバドル カナダ キューバ グアテマラ グレナダ コスタリカ ジャマイカ セントクリストファー・ネイビス セントビンセント及びグレナディーン諸島 セントルシア ドミニカ共和国 ドミニカ国 トリニダード・トバゴ ニカラグア ハイチ パナマ バハマ バルバドス ベリーズ ホンジュラス メキシコ	アルゼンチン ウルグアイ エクアドル ガイアナ コロンビア スリナム チリ パラグアイ ブラジル ベネズエラ ペルー ボリビア

「別紙2-3」 【 (1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 d 「b-イ 世界の諸地域」で取り上げている州別国名 】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	アジア	オセアニア	ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	南アメリカ	
帝 国	アフガニスタン アラブ首長国連邦 イエメン イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カザフスタン カタール カンボジア クウェート サウジアラビア シリア シンガポール スリランカ タイ 韓国 中国 北朝鮮 トルクメニスタン トルコ 日本 ネパール	オーストラリア ツバル ニュージーランド バプアニューギニア フィジー	アイスランド アイルランド イギリス イタリア ウクライナ エストニア オーストリア オランダ キプロス ギリシャ クロアチア スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー ハンガリー フィンランド フランス ブルガリア ペラルーシ	ベルギー ポーランド ポルトガル マルタ ラトビア リトアニア ルーマニア ルクセンブルク ロシア	アルジェリア マリ 南アフリカ共和国 南スーダン モリタニア ガーナ リビア カメルーン ギニア ケニア コートジボワール コンゴ共和国 コンゴ民主共和国 ザンビア ジンバブエ スーダン タンザニア チャド チュニジア ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ボツワナ マダガスカル	アメリカ合衆国 カナダ キューバ グアテマラ コスタリカ ジャマイカ ドミニカ共和国 ハイチ パナマ メキシコ	アルゼンチン エクアドル コロンビア チリ パラグアイ ブラジル ベネズエラ ペルー ボリビア
日 文	アフガニスタン アラブ首長国連邦 イエメン イスラエル イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カザフスタン カタール カンボジア 北朝鮮 キルギス クウェート サウジアラビア シリア シンガポール スリランカ タイ 韓国 タジキスタン 中国 トルクメニスタン	トルコ 日本 ネパール バーレーン パキスタン バングラデシュ フィリピン ブータン ベトナム マレーシア ミャンマー モンゴル ヨルダン アゼルバイジャン アルメニア ジョージア キプロス	オーストラリア クック諸島 ツバル ニュージーランド バプアニューギニア フィジー	アイルランド リトアニア アルバニア ルーマニア イギリス イタリア ウクライナ エストニア オーストリア オランダ ルクセンブルク ギリシャ クロアチア スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー バチカン市国 ハンガリー フィンランド	フランス ブルガリア ペラルーシ ベルギー ポーランド ポルトガル マルタ モルドバ ラトビア ロシア	アルジェリア アンゴラ ウガンダ エジプト エチオピア ガーナ カメルーン ケニア コートジボワール コンゴ民主共和国 ザンビア ジンバブエ タンザニア チュニジア ナイジェリア ナミビア ボツワナ マダガスカル 南アフリカ共和国 南スーダン モザンビーク モロッコ リビア リベリア ルワンダ	アメリカ合衆国 カナダ キューバ パナマ メキシコ アルゼンチン ウルグアイ エクアドル コロンビア チリ パラグアイ ブラジル ベネズエラ ペルー ボリビア

「別紙2-4」 【 (1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域名と内容 】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	具体的な地域名	具体的な学習の内容
東 書	広島 秋田県秋田市 神戸市 三重県紀北町 大阪府豊中市 香川県坂出市 神奈川県川崎市 岐阜県白川村 京都 広島県広島市 福岡 大阪 東京 北海道 沖縄 京都市	1 課題をとらえ、問いを立てよう ・学んできたことを振り返ろう ・地域とテーマを決めよう 2 地域を調査し、課題をとらえよう ・地域の特色と課題を調べよう ・地域の移り変わりに注目しよう 3 課題の要因や影響を考察しよう ・ほかの地域を調べて比べよう ・要因や影響を考察しよう 4 解決策を議論し、構想しよう ・課題の解決策を構想しよう ・構想したことを議論して深めよう 5 地域のこれからの提案し、発信しよう ・説得力のある提案をしよう ・地域の未来像を広く発信しよう
教 出	鳥取県八頭市 東京都江東区 東京都港区 東京都中央区 長野県小諸市 埼玉県春日部市 熊本県水俣市 新潟県新潟市 富山県富山市 三重県四日市市	1 地域の課題をとらえる ・地域の課題をとらえる ・都市の課題 ・農村の課題 2 地域の課題を調べよう ・地域調査の方法を振り返ろう ・地域調査を始めよう 3 地域の特色をまとめよう 4 調査結果を整理しよう 5 調査結果を地域に伝えよう ・発表会をしよう ・研究をさらに広げていくために
帝 国	兵庫県神戸市 大阪府大阪市 徳島県海陽町	1 追究するテーマを決めよう ・様々な課題を振り返ろう ・追究するテーマを決めよう 2 地域の実態を調査しよう ・資料と情報を調査しよう 3 地域の魅力と課題を分析・考察しよう ・資料と情報を整理しよう ・魅力と課題の要因を考察しよう 4 地域の課題の解決策を構想しよう ・課題の解決に向けた取り組みを調べよう ・解決策を構想しよう ・構想した解決策を議論しよう 5 解決策と魅力を高める提案をしよう ・構想したことをまとめよう ・地域社会に向けて発信しよう ・持続可能な社会を目指す一員として
日 文	宮崎県宮崎市 富山県富山市 熊本県 大分県 鹿児島県 東京都東京23区 神奈川県横浜市 埼玉県さいたま市 奈良県奈良市 群馬県前橋市 福岡県 大阪府 神奈川県 千葉県	1 考察・構想するテーマを決めよう ・持続可能な社会づくりを意識する ・多面的・多角的に考察・構想する 2 地域の課題の解決策を考察しよう ・地域の課題の解決策を考える ・課題の解決につながる取り組みを調べる 3 情報を集めて構想しよう ・地域の在り方を構想する情報を集める ・情報を共有して構想する 4 構想した内容を整理してまとめよう ・構想した内容をまとめる ・提案を地域に発信する

発行者	東京に関する地理的事象を取り上げている項目			
東 書	<ul style="list-style-type: none"> ・国土の広がりや周りの国々 (p8) ・緯度・経度で表す位置 (p17) ・地球儀と地図との関係 (p18) ・緯線と経線が直角に交った地図 (p19) ・中心からの距離と方位が正しい地図 (p19) ・面積が正しい地図 (p19) ・日本と同じ緯度、同じ経度の範囲 (p22) ・東京からの距離と方位が正しい地図 (p23) ・ロンドンからの距離と方位が正しい地図 (p23) ・12月20日午前5時の福岡市と東京の様子 (p24) ・1月1日、午前9時の東京とその時のロンドンとニューヨーク (p24) ・世界の等時帯と日本との時差 (p25) ・日本の領域と排他的経済水域 (p26) ・工事前と工事後の沖ノ鳥島 (p26) ・日本の領域と排他的経済水域の範囲 (p27) ・変化し続ける国土面積 (p27) ・竹島、尖閣諸島、北方領土の位置 (p28) ・多摩川を境にした神奈川県と東京都 (p31) ・寒帯の分布 (p37) ・イカルイトと東京の雨温図 (p37) ・雨温図の読み取り方 (p37) ・亜寒帯 (冷帯) の分布 (p39) ・イルクーツクと東京の雨温図 (p39) ・温帯の分布 (p41) ・ローマと東京の雨温図 (p41) ・乾燥帯の分布 (p43) ・ニアメと東京の雨温図 (p43) ・熱帯の分布 (p45) 	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアと東京の雨温図 (p45) ・高地の分布 (p47) ・クスコと東京の雨温図 (p47) ・世界に見られる様々な気候 (p49) ・高さ200m以上の高層ビルの数 (p60) ・アジアの自然 (p62) ・総人口に占めるソウルと東京の人口 (p67) ・アジアの主な都市の製造業の賃金 (p69) ・都市部が広がる様子 (p156) ・都市部に集中する日本の人口 (p170) ・日本の人口密度 (p170) ・大都市圏に集中する商業やサービス (p175) ・第三次就業圏の県別割合 (p175) ・新幹線と主な空港・航空路 (p176) ・東京・大阪間の移動時間の変化 (p176) ・建設が進むリニア中央新幹線 (p176) ・東京国際空港を飛び立つ航空機 (p177) ・コンテナの積み下ろし (p177) ・交通網で世界と結び付く日本 (p177) ・東京からの移動時間に着目した例 (p179) ・東京からの移動時間で地域区分した例 (p179) ・九州地方の位置と福岡市からの距離 (p192) ・大都市へ出荷される農水産物 (p203) ・中小企業の工場が多く集まる東大阪市 (p213) ・交通網や通信施設が集中する首都・東京 (p232) ・旅客数が多い国内の航空路線 (p232) ・電車も、バスも、飛行機も (p232) ・県章・シンボル (p232) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関東地方の自然 (p233) ・各地の雨温図 (p233) ・日本最大の関東平野 (p233) ・関東地方の人口と交通 (p234) ・外国人観光客に人気の観光地 浅草 (p235) ・探求課題の解決へ向けて追究していくこと (p235) ・世界各地からの航空機が到着する東京国際空港 (p235) ・世界や日本と結び付く東京 (p236) ・東京は、日本各地や世界とどのような形でつながっているのでしょうか。 (p236) ・情報が集積する日本の中心都市 (p236) ・世界都市・東京 (p236) ・東京への集中 (p236) ・官庁街と国会議事堂 (p237) ・世界への玄関口・関東地方 (p237) ・東京都港区における外国大使館の分布 (p237) ・東京を訪れる外国人観光客数の移り変わり (p237) ・都道府県別の在留外国人数の割合 (p237) ・東京大都市圏の拡大 (p238) ・通勤・通学圏の広がり (p238) ・朝の通勤時間帯の新宿駅 (p238) ・通勤・通学で結び付く東京大都市圏 (p238) ・東京23区への通勤・通学者 (p238) ・東京23区の昼夜間人口 (p238) ・東京大都市圏の課題と対策 (p239) ・東京周辺の地価と鉄道網 (p239) ・都心・副都心 (p239) ・上空から見た品川駅 (p239) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関東地方の工業地域の広がり (p240) ・東京に出荷される野菜の県別割合 (p241) ・大消費地と結び付く農業 (p241) ・日本の諸地域をふり返ろう (p268) ・外国人観光客の都道府県ごとの宿泊者数 (p274) ・外国人観光客の都道府県ごとの宿泊数 (p274)
教 出	<ul style="list-style-type: none"> ・地理にアプローチ～地図やグラフを使いこなそう (p3) ・地球番地、33番地 (p9) ・地球儀と世界地図の違い (p10) ・面積が正しい地図 (p11) ・図の中心からの距離と方位が正しい地図 (p11) ・角度が正しい地図 (p11) ・日本の午前9時は、世界で何時? (p16) ・ロンドンと東京・ニューヨークの時刻と位置の関係 (p16) ・イギリスを基準とした世界の等時帯を表した図 (p16) ・日本の領土・領海と排他的経済水域 (p18) ・面積が拡大した西之島 (p18) ・日本の最南端をめぐる問題 (p19) ・日本の都道府県と七地方区分 (p22) ・都道府県庁所在地と成り立ち (p23) ・世界の気候帯の分布 (p26) ・雨温図 (p27) ・温帯の自然環境 (p33) ・アジア州の地勢と国々 (p46) ・夏季オリンピックの開催国・都市の分布 (p127) ・日本の世界遺産の分布 (p130) ・都道府県ごとに見たコンビニエンスストアの店舗数 (p145) ・地域区分をしてみよう (p146) ・地域の結びつきによる区分 (p146) ・日本の人口密度の分布 (p162) ・三大都市圏への人口集中 (p162) ・東京圏・大阪圏への人口移動 (p162) ・都市への人口移動 (p162) ・宅地開発の進む東海道新幹線の沿線 (p163) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の工業地帯・工業地域と出荷額の割合 (p167) ・第三次産業とその立地 (p167) ・日本の高速交通網の移り替わり (p169) ・温暖な気候を農業に生かす (p178) ・軍都と原爆、そして復興 (p190) ・交通手段の多様化 (p197) ・本州・四国間の高速バスの輸送客数の変化 (p197) ・基盤の目のような街並み (p206) ・日本の工業地帯・地域の生産割合の変化 (p208) ・卸売業の年間商品販売額に占める東京都・大阪府・愛知県との割合の変化 (p210) ・琵琶湖の水の利用 (p212) ・特徴ある三つの地域の産業 (p219) ・主な工業地帯・工業地域の生産額の割合 (p220) ・日本の主な地場産業と伝統工芸産地の分布 (p227) ・東京23区への通勤・通学者 (p232) ・東京駅と通勤する人々 (p231) ・観光を楽しむ外国人観光客 (p233) ・学習の視点 (p233) ・日本の首都 東京 (p234) ・高層ビル群と郊外に広がる市街地 (p234) ・関東ローマ (p234) ・関東地方の地勢と各都県 (p235) ・内陸と海沿いで異なる気候 (p235) ・イルカウォッチングを楽しむ観光客 (p235) ・東京の都心 (p236) ・首都としての役割 (p236) ・副都心の発達 (p236) ・東京都と関東地方への集中 (p236) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都区部の昼間と夜間の人口 (p237) ・東京の中心部に集中する施設 (p237) ・日本国内の主な航空路線と旅客数 (p237) ・東京周辺の昼間と夜間の人口 (p237) ・東京湾の臨海部の再開発 (p237) ・再開発により多くのビルが建つ東京湾の臨海部 (p237) ・郊外に広がる市街地 (p238) ・市街地拡大にともなう問題 (p238) ・東京大都市圏にみる地価の比較 (p238) ・新都心の開発 (p239) ・鉄道に沿って拡大する東京大都市圏の市街地 (p239) ・東京23区への通勤・通学者の分布 (p239) ・災害に強い都市を旨として (p239) ・長距離通勤をする、横須賀市に住む中野さん (p239) ・沿岸部の工業地域 (p240) ・高い技術で精巧な金属加工を行う工場 (p240) ・大都市と結びついた農業 (p241) ・関東地方における工業都市の分布 (p241) ・ブルーベリー狩りを楽しむ観光客 (p241) ・大勢の人でにぎわうエスニックタウン (p242) ・世界の中の東京 (p242) ・国際的な交通の拠点 (p242) ・日本の主な港の貿易額 (p242) ・増加する外国人 (p243) ・関東地方の主な港の貿易品目 (p243) ・関東地方・東京都に暮らす外国人の割合 (p243) ・情報を生かした産業 (p243) ・ユネスコに登録された日本の無形文化遺産の分布 (p253) 	<ul style="list-style-type: none"> ・やませを利用する (p256) ・過疎地域の廃屋 (p278) ・都市の課題 (p279) ・都心のタワーマンション (p279) ・農村の課題 (p279)

発行者	東京に関する地理的事象を取り上げている項目			
帝 国	<ul style="list-style-type: none"> ・地理的な見方・考え方(巻頭8) ・地球儀と世界地図の違い(p10) ・緯線と経線が直角に交わる地図(p11) ・面積が正しい地図(p11) ・中心からの距離と方位が正しい地図(p11) ・日本と同じ緯度・同じ経度の範囲(p14) ・初詣で混雑する神社(p16) ・東京が1月1日午前9時の時に北極の真上からみた地球(p16) ・ロンドンが1月1日午前0時のときの主な都市の時刻を表した地図(p17) ・世界の等時帯(p17) ・沖ノ鳥島(p18) ・日本の東西南北の端と排他的経済水域の範囲(p18) ・波の浸食から守るための護岸工事が施された沖ノ鳥島(p18) ・活発な噴火を続ける西之島(p18) ・排他的経済水域(p18) ・南鳥島(p18) ・護岸工事によって守られた沖ノ鳥島(p19) ・排他的経済水域(p19) ・活発な噴火を続ける西之島(p19) ・都道府県の成り立ち(p22) ・東京都の都庁所在地は「東京」?(p23) ・学習を振り返ろう 2章日本の姿(p25) ・世界の気候帯(p29) ・さまざまな気候帯の雨温図(p29) ・雨温図の読み取り方(p29) ・ジャカルタと東京の雨温図(p30) ・熱帯の分布(p30) ・乾燥帯の分布(p31) 	<ul style="list-style-type: none"> ・サララーと東京の雨温図(p32) ・温帯の分布(p34) ・マドリッドと東京の雨温図(p34) ・亜寒帯(冷帯)と寒帯の分布(p36) ・ヤクーツクと東京の雨温図(p36) ・高地の分布(p38) ・クスコと東京の雨温図(p38) ・アジアの人口密度(p51) ・東京の卸売市場で取り扱われるかぼちの産地(p124) ・地域を眺めよう(p128) ・東京都練馬区大泉地域の位置(p128) ・空から見た学校周辺の様子(p128) ・練馬区大泉地域の例(p129) ・5万分の1地形図(p130) ・図3と同じ範囲を示した2万5千分の1地形図(p130) ・練馬区大泉地域の変化(p133) ・野外調査の手順(p134) ・調査項目と調査方法を考えよう(p134) ・「地理院地図」を使ってルートマップを作成した例(p135) ・畑に隣接する新しい住宅地(p136) ・引越してきた住民の話(p136) ・農業を営む人の話(p136) ・地域分析ができるウェブサイトを使って練馬区の農家数の分布を調べた例(p138) ・調査結果をグラフや地図にまとめよう(p138) ・調査結果を分析・考察した例(p139) ・大都市に集中する人口(p152) ・日本の主な工業地域(p159) ・コンテナの積み降ろし(p162) 	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄道を利用した東京～大阪間の移動時間の変化(p163) ・新幹線と主な航空路(p163) ・外国人旅行者向けの観光案内所(p163) ・地域区分から特色をつかむ(p164) ・自然環境を視点にした地域区分の例(p164) ・人口を視点にした地域区分の例(p164) ・九州の中心都市としての役割(p176) ・九州地方の位置と大陸との結びつき(p176) ・自然を生かした産業(p178) ・日本の公害(p182) ・交通網の発達による市場の拡大(p193) ・高知県の野菜の主な出荷先への輸送手段(p193) ・東京へのなすの出荷量と価格(p193) ・通信網を生かした地域おこしの取り組み(p198) ・結びつきを強める名古屋大都市圏(p223) ・涼しい気候を生かした高原野菜(p226) ・東京へのレタス出荷量(p227) ・関東地方(p233) ・ビルが密集する都心部と通勤時間帯の東京駅前の様子(p234) ・関東地方の自然環境(p236) ・世界遺産に登録されている小笠原諸島の父島(p136) ・内陸と海沿いで異なる気候(p237) ・首都圏外郭放水路とその位置(p237) ・関東地方の主な都市の雨温図(p237) ・霞が関にある官庁街とその周辺(p238) ・東京の中心部に集中するさまざまな機関(p238) ・東京都の主な区における昼間人口と夜間人口(p238) ・日本の首都東京(p238) 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通網の中心となる東京(p238) ・世界都市Tokyo(p239) ・ターミナル駅となっている新宿駅(p239) ・通勤・通学時間帯に混雑する新宿駅(p239) ・東京への集中(p239) ・都心と副都心(p239) ・東京大都市圏(p240) ・開発が進む東京の湾岸地域(p240) ・東京大都市圏の拡大と東京23区への通勤・通学者数(p240) ・東京大都市圏の拡大(p240) ・東京大都市圏の過密とその対策(p240) ・全国2位の大都市・横浜(p241) ・東京都多摩市の人口ピラミッドの変化(p241) ・臨海部から発達した関東地方の工業(p242) ・印刷工場での製本作業の様子(p242) ・関東地方の主な工場と出荷額(p242) ・北関東への工場進出(p242) ・第3次産業の発達(p243) ・仕分けされた宅配便の荷物を積み込む様子(p243) ・ゲームの製作会社の様子(p243) ・大田市場に集められた茨城県産のはくさい(p244) ・食料の大消費地を支える農業(p244) ・山間部の過疎問題と地域の再生(p245) ・野菜などの主な栽培地と各県の農業産出額の内訳(p245) ・上野村に移住した人の話(p245) ・学習を振り返ろう 5節関東地方(p246) ・路面電車が走る都市(p248)
日 文	<ul style="list-style-type: none"> ・緯度・経度のしくみ(p10) ・角度が正しい地図(p13) ・面積が正しい地図(p13) ・中心からの距離と方位が正しい地図(p13) ・国土の東端(p18) ・国土の南端(p18) ・日本の領域をとらえる(p18) ・日本の領域と排他的経済水域(p19) ・護岸工事で保護された沖ノ鳥島(p19) ・沖ノ鳥島を守るために(p19) ・河川の県境(p22) ・世界の気候区分(p28) ・雨温図の読み取り方(p28) ・クアラルンプール・東京の雨温図(p30) ・熱帯気候の分布(p30) ・ウランバートル・東京の雨温図(p32) ・乾燥帯気候の分布(p32) ・ローマ・東京の雨温図(p34) ・温帯気候の分布(p34) ・ウトキアグビク・東京の雨温図(p36) ・冷帯気候・寒帯気候の分布(p36) ・ラパス・東京の雨温図(p38) ・世界の高地の分布(p38) ・アジア各地の雨温図(p48) ・日本の人口密度と主な都市の分布(p145) ・日本の人口密度と主な都市の分布(p156) ・人口分布のかたよりと課題(p157) ・海上輸送(p162) 	<ul style="list-style-type: none"> ・高速交通網の整備(p163) ・東京と各県の人の移動におけるJR線と航空機の割合(p163) ・JR新宿駅の1日平均乗降者数(p165) ・九州北部の稲作(p178) ・南北を結ぶ交通網の整備と地域の変化(p192) ・大消費地へ輸送される農産物・水産物(p196) ・過疎地域における交通・通信の活用(p198) ・東京23区・横浜市・名古屋市・大阪市の事業所数(p210) ・東大阪市・大阪市・東京23区・名古屋市の中小企業の事業所数(p213) ・工業からみた東海の特徴(p225) ・軽井沢町への地方別転入者数(p227) ・朝の東京駅の様子(p234) ・関東地方の地形(p236) ・関東地方の人口密度と交通網(p236) ・関東地方各地の雨温図(p236) ・人々の活動が影響している自然環境(p237) ・東京都の島々(p237) ・伊豆諸島・小笠原諸島の位置と小笠原諸島の父島(p237) ・東京の年間の熱帯夜日数の変化(p237) ・多摩ニュータウン(p238) ・多摩ニュータウンの地区ごとの高齢化率(p238) ・多摩ニュータウンに住む瀧口さんの話(p238) ・ニュータウンの課題と再生をめざす取り組み(p238) ・東京圏に住む人の通勤時間(p239) ・諏訪地区でのマンションの建てかえ工事のようすと新しく建設されたマンション(p239) ・ニュータウンの開発(p239) ・郊外の住宅地(p240) ・東京の副都心・新宿(p240) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京の都心の商業地区(p240) ・東京23区への通勤・通学者数(p240) ・東京の都心3区の昼間人口と夜間人口のちがいが(p240) ・日本の人口分布(p240) ・東京の都心と副都心(p240) ・郊外の住宅地の広がり(p240) ・人口が急増している東京湾の臨海部に建設された高層マンション(p241) ・地価の比較(p241) ・過密化の課題(p241) ・交通網の変化で一体化する東京大都市圏(p241) ・日本の首都・東京(p242) ・世界都市・東京(p242) ・東京の都心に集まる様々な国の機関(p242) ・東京の地位(p242) ・関東地方と関東地方以外の人口の変化(p242) ・情報社会がもたらす新しい暮らし(p243) ・世界が目目!日本の都市文化(p243) ・情報通信業の従業者数の多い県(p243) ・東京都でテレワークを実施している企業の割合(p243) ・大消費地を支える関東地方の農業(p245) ・過密化による課題への取り組み(p246) ・防災面での課題への取り組み(p246) ・荒川周辺の再開発地区とスーパー堤防・排水機場(p246) ・世田谷区の再開発地区(p246) ・オフィスビルの床面積(p246) ・都市機能を分散させる取り組み(p247) ・「地理院地図」で示した東京23区と周辺の標高(p247) ・としまみどりの防災公園を走る電気バス(p247) 	<ul style="list-style-type: none"> ・地下調整池(p247) ・北海道の観光や交通の課題(p277) ・移住者(起業家)への聞き取り調査結果(p288) ・移住センターに聞き取り調査した班から(p289)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他
東書	<p>【本文】貴重な自然が残る北方領土 北海道東方の歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島は北方領土とよばれ、根室市などに属する日本固有の領土です。しかし、現在はロシアが不法に占拠しており、日本は抗議を続けています。 北方領土は、カムチャツカ半島から北海道まで連なる島々の南に位置しており、北海道東部の納沙布岬と、歯舞群島の西部の貝殻島とは、約4kmしかはなれていません。 歯舞群島は平たんな島々が多く、その北東にある色丹島も標高が低い一方、国後島や択捉島は起伏のある大きな島です。なかでも択捉島は、日本の領土の中で、面積が四国に次いで大きい島です。これらの島々は、一年を通して気温が低いため、標高が低い場所にも高山植物が見られます。こうした貴重な自然環境の保護が必要です。 国後島北部にある爺爺岳は活火山で、標高1772mの北方領土の最高峰です。1973年の噴火では、北海道の東部にも火山灰が降り降りました。 歯舞群島や色丹島、国後島は、広い大陸棚に囲まれており、からふとますやさけなどの、豊富な水産資源にもめぐまれています。(p29) 【写真】北海道の根室半島上空から見た歯舞群島 (p29) 【写真】自然環境にめぐまれた択捉島 (p29) 【図】歯舞群島がのる2万5000分の1地形図 (p29) 【図】北方領土周辺の地形 (p29) 【写真】竹島、尖閣諸島、北方領土の位置 (p28) 【図】北海道地方の自然 (p257) 【本文】海と生きる ロシアとの間では、北方領土をめぐる領土問題が解決していないため、漁場や操業権をめぐる緊張関係も続いています。(p261)</p>	<p>【本文】水産資源に恵まれた竹島 竹島は、島根県隠岐の島町に属し、隠岐諸島の北西、約150kmに位置する日本固有の領土です。しかし、韓国が不法に占拠しているため、日本は抗議を続けています。 竹島は、日本海の中央にある海中の巨大な台地のふちに位置し、標高168mの男島（西島）と、標高97mの女島（東島）を中心に、いくつかの島で構成されています。もともと古い海底火山の噴火でできた島でしたが、周囲が波に浸食され、現在のような断崖に囲まれた地形になりました。 竹島周辺の海は、東シナ海から流れてくる暖流の対馬海流と、樺太（サハリン）から流れてくる寒流のリマン海流とがぶつかる潮目に近いため、かにやいか、あじなどの回遊魚といった、豊富な水産資源にめぐまれています。(p28) 【写真】竹島 (p28) 【図】竹島の2万5000分の1地形図 (p28) 【写真】竹島、尖閣諸島、北方領土の位置 (p28)</p>	<p>【本文】資源が期待される尖閣諸島 尖閣諸島は、沖縄県石垣市に属する日本固有の領土で、中心である魚釣島は、石垣島の北、約170kmに位置します。日本が有効に支配をしているため、領土問題はありませんが、中国や台湾が領有権を主張しています。 尖閣諸島は、東シナ海の大陸棚の南東のふちに位置し、魚釣島、久場島、南小島、北小島など、大小八つの主な島で構成されます。最大の魚釣島は東西が約4km、南北が約1.5kmで、最高地点の標高は362mです。 魚釣島は、もともと楕円形の島だったものが、波によって南側が大きく浸食され、現在の形になったと考えられています。久場島は円形で、中心に丸い形の小さなぼみがあるため、火山だと考えられています。噴火の記録は残っていません。 尖閣諸島は温暖な気候に特有の植生が広がり、魚釣島などは隆起して海面上に現れたさんご礁に囲まれています。 一方、国際連合（国連）の関係機関の調査では、周辺の大陸棚では石油が採れる可能性が指摘されています。また、尖閣諸島の南の海底には、地中のマグマが海水に冷やされ、資源になる鉱物が固まった熱水鉱床があると考えられています。(p29) 【図】久場島の5万分の1地形図 (p28) 【写真】尖閣諸島の南小島、北小島、魚釣島 (p28) 【写真】尖閣諸島の久場島 (p29) 【写真】竹島、尖閣諸島、北方領土の位置 (p28)</p>	<p>【本文】地理的に見る島々の特色 日本は大小さまざまな島で構成されていますが、となり合う国との間で、領土をめぐる問題をかかえる島々もあります。ここでは、自然環境や、問題の背景の一つである資源に着目して、こうした島々の地理的な特色を、さまざまな角度から見ていきましょう。(p28)</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土の扱いについて、特記すべき事項があれば記載する。

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他
教 出	<p>【図】日本の領土・領海と排他的経済水域（p18）</p> <p>【本文】北方領土をめぐる問題</p> <p>地図中の千島列島を見ると、カムチャツカ半島とシムシウ島の間と、ウルップ島と択捉島との国境線に気づきます。2本の国境線に挟まれたシムシウ島からウルップ島までの島々は白で示されています。</p> <p>カムチャツカ半島まではロシア連邦の領土、択捉島の東にある国境線から北海道までは日本の領土ですが、2本の国境線の間にある白で示された島々は帰属が未定の地域を示しています。</p> <p>北海道の東に位置する歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を北方領土とよびます。北方領土は、1945年の第二次世界大戦の終結後にソ連に占領されました。終戦時には北方領土には約17000人の日本人が生活していましたが、強制退去させられました。北方領土はソ連の解体後も現在に至るまで、ロシア連邦によって不法に占拠されています。日本政府は、ロシア連邦政府に対し、日本固有の領土である北方領土の返還を求め続けていますが、いまだに実現されていません。1992年から続く北方領土へのビザなし交流は2022年9月以降、ロシアにより停止されています。（p20）</p> <p>【資料】北方領土に関する主なできごと（p20）</p> <p>【図】北方領土とその周辺（p20）</p> <p>【図】南東を上にして、日本海周辺を描いた地図（p21）</p> <p>【写真】ビザなし交流で根室港に到着したロシア側からの訪問団（p20）</p> <p>【本文】EUや日本とのつながり</p> <p>日本海を挟んで対岸にある日本との関係も深まっています。特に、ロシアは石油・天然ガスなどの鉱山資源だけでなく、魚介類や、木材を日本に輸出しています。また、日本からは自動車などをロシアに輸出しており、両国の経済的な結びつきが強まっています。その一方で、北方領土をめぐる問題などはいまだに解決しておらず、大きな課題となっています。（p75）</p> <p>【本文】北海道の自然環境</p> <p>北海道の東部には、阿寒湖の周辺から知床半島へと火山が列のように並び、国後島や択捉島まで続きます。（p264）</p>	<p>【図】日本の領土・領海と排他的経済水域（p18）</p> <p>【本文】竹島と尖閣諸島</p> <p>竹島周辺では、江戸時代の初めから日本人が漁業を行ってきました。1905年に政府は、竹島を閣議決定に基づき島根県に編入し、日本固有の領土としました。1952年以降、韓国が竹島を自国の領土として主張し、現在まで不法に占拠し続けています。日本はこれに抗議を重ねるとともに、国際社会の場での話し合いを提案していますが、韓国は受け入れていません。（P21）</p> <p>【図】南東を上にして、日本海周辺を描いた地図（p21）</p> <p>【写真】竹島（p21）</p>	<p>【図】日本の領土・領海と排他的経済水域（p18）</p> <p>【本文】竹島と尖閣諸島</p> <p>尖閣諸島は、1895年に沖縄県に編入された日本固有の領土です。第二次世界大戦後には、アメリカ合衆国の施政の下に置かれていましたが、1971年に沖縄返還協定が結ばれ、翌年日本に復帰しました。尖閣諸島は、アメリカ合衆国の施政の下にあった期間を除いて日本が領有し、有効に支配を続けてきました。しかし、1970年代から、周辺海域に埋蔵されているとされる資源をめぐり、中国が領有を主張し始め、2012年、日本は島々の大半を国有化しました。近年、中国船が尖閣諸島周辺の日本の領海や接続水域にたびたび侵入する事態が生じています。（p21）</p> <p>【図】南東を上にして、日本海周辺を描いた地図（p21）</p> <p>【写真】尖閣諸島（p21）</p>	<p>【図】日本の領土・領海と排他的経済水域（p18）</p> <p>【本文】竹島と尖閣諸島</p> <p>領土をめぐる対立については、武力衝突や戦争の原因となることもあります。各国が冷静に問題に向き合い、対立を乗り越えて平和的な解決を目指すことが重要です。（P21）</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土の扱いについて、特記すべき事項があれば記載する。

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他
帝国	<p>【本文】北方領土 北海道の北東部にある歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島は、北方領土とよばれ、北海道根室市などに属する日本固有の領土です。1855年に、日本とロシアの国境を択捉島とウルップ島の間で確認してから、北方領土をほかの国の領土とする条約が結ばれたことはありません。北方領土の近海は水産資源が豊かで、かつて多くの日本人がこれらの島に住んでいました。</p> <p>しかし、北方領土は1945年に、日本との条約を無視して一方的に侵攻してきたソビエト連邦に占領され、日本人は立ちのきされました。ソビエト連邦はサンフランシスコ平和条約に署名せず、現在までロシアが不法に占拠した状態となっています。日本は、北方領土の返還に向けてロシアと平和条約を結ぶため、交渉が続いています。(P20)</p> <p>【写真】 択捉島(北海道、2018年11月) (P18) 北方領土の島々 (P20) 日本国民と北方領土に住むロシア人との交流 (P20)</p> <p>【地図】 日本の東西南北の端と排他的経済水域の範囲 (P18) 北方領土周辺の国境の移り変わり (P20)</p>	<p>【本文】竹島 日本海にある竹島は、島根県隠岐の島町に属する日本固有の領土です。17世紀には現在の鳥取県の人々が漁を行っており、1905年に明治政府が島根県への編入を内閣で定めて、自国の領土とする考えを公式に示しました。</p> <p>しかし、サンフランシスコ平和条約で竹島に対する主張を退けられた韓国は、1952年に海洋への権利を唱えて一方的に公海の上に境界を設け、竹島に海洋警察隊や灯台を置いて、不法に占拠しています。日本は国際法に基づいて抗議し、国際司法裁判所での話し合いをたびたび呼びかけていますが、韓国は応じていません。(P20~21)</p> <p>【コラム】漁業が盛んだった昔の竹島 竹島は、暖流の対馬海流と寒流のリマン海流がぶつかる潮目に位置しているため、周辺の海は昔からさまざまな魚介類がとれる豊かな漁場でした。17世紀の初めには、米子(鳥取県)の人々が江戸幕府の公認の下で、1900年代からは隠岐(島根県)の人々が、あしか狹やあわび漁を行っていました。</p> <p>1905年、隠岐の島民の願い出を受けた明治政府は、島の島根県への編入を定め、竹島と命名しました。それを告示した2月22日は、2005年に島根県議会により「竹島の日」と定められました。(P21)</p> <p>【写真】 竹島 (P21) 隠岐の人々が行っていた竹島での漁の様子 (P21)</p> <p>【地図】 日本の東西南北の端と排他的経済水域の範囲 (P18) 竹島の位置 (P21)</p>	<p>【本文】尖閣諸島 東シナ海にある尖閣諸島は、沖縄県石垣市に属する日本固有の領土です。明治政府が、ほかの国の支配が及んでいないことを慎重に確認したうえで、1895年に沖縄県への編入を内閣で定めて、自国の領土とする考えを公式に示しました。その後、一時は島で200人以上が暮らし、かつおぶし工場もつくられました。サンフランシスコ平和条約でも、南西諸島の一部として日本の領土とされました。尖閣諸島をほかの国の領土とする条約が結ばれたことはなく、日本政府による管理も及んでいるため、ほかの国との間で解決すべき領有をめぐる問題はありません。</p> <p>尖閣諸島では、1960年代には、原油などの資源が周辺の海底にある可能性が注目され、1970年代に入ると、中国などが領有権を主張するようになりまし。日本は尖閣諸島を平穩に維持、管理するため2012年にその大半を国有化しました。(P21)</p> <p>【写真】 尖閣諸島 (P21)</p> <p>【地図】 日本の東西南北の端と排他的経済水域の範囲 (P18) 尖閣諸島の位置 (P21)</p>	<p>【本文】国際法に基づく日本の領土 日本の領域は、歴史的ないきさつも踏まえて、国際法に基づいて定められてきました。現在の日本の領土は、第二次世界大戦後の1951年に結ばれたサンフランシスコ平和条約によって定められました。しかし、日本の領域には、領有をめぐる隣国との間で課題がある地域もあります。(P20)</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土の扱いについて、特記すべき事項があれば記載する。

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他
日 文	<p>【本文】北方領土 北方領土は、歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島からなる日本固有の領土です。面積は合計約5000km²もあり、福岡県や千葉県とほぼ同じ広さです。日本は18世紀ごろから本格的な開発を始め、1855年の日露通好条約で、日本の領土であることが確認されました。周辺の海域は、こんぶやかになどの水産資源が豊富で、かつては多くの日本人が漁業をしながら生活していました。しかし、1945年の第二次世界大戦後にソ連に占領され、ソ連解体後もロシアが不法に占拠しています。ソ連に占領されるときに、当時住んでいた日本人はふるさとを追われ、現在、北方領土に日本人は住んでいません。日本は、北方領土の返還をロシアに強く要求していますが、いまだに実現していません。(p20)</p> <p>【本文】領土問題の解決に向けて 北方領土では、領土問題の解決に向けて、元島民を含む日本人と北方領土に住むロシア人が交流を深めてきました。(p21)</p> <p>【図】北方領土・竹島・尖閣諸島の位置 (p20)</p> <p>【図】北方領土付近の国境の変化 (p20)</p> <p>【写真】元島民らによる洋上からの先祖の慰霊 (p21)</p> <p>【写真】国土の北端 (p18)</p> <p>【写真】羅臼町から見た国後島 (p21)</p> <p>【写真】北方領土・竹島・尖閣諸島などに関する資料を展示する国立の施設「領土・主権展示館」 (p21)</p>	<p>【本文】竹島 竹島は、本州から約200kmはなれた日本海にある日本固有の領土です。竹島周辺は豊かな漁場で、17世紀初めには日本人が漁業などに利用していました。1905年には国際法に従って島根県に編入されました。ところが1952年から、韓国が、一方的に自国の領土であると主張して竹島を取りこみ、警備隊員を常駐させたり、施設を作ったりして、不法に占拠しています。日本は、韓国に対して何度も厳重に抗議しています。(p20)</p> <p>【本文】領土問題の解決に向けて 竹島については、この問題を国際司法裁判所で取り上げるように韓国に提案していますが、韓国は拒否しています。(p21)</p> <p>【図】日本の領域と排他的経済水域 (P19)</p> <p>【図】北方領土・竹島・尖閣諸島の位置 (p20)</p> <p>【写真】竹島 (p21)</p> <p>【写真】竹島に関する資料を展示する「竹島資料室」 (p21)</p> <p>【写真】北方領土・竹島・尖閣諸島などに関する資料を展示する国立の施設「領土・主権展示館」 (p21)</p>	<p>【本文】尖閣諸島をとりまく情勢 尖閣諸島は、石垣島から約170kmはなれた東シナ海にあります。1895年に日本が自国の領土であることを宣言して、沖縄県に編入しました。また、サンフランシスコ平和条約でも日本の領土とされ、このことに周辺の国々からの反対はありませんでした。その後も、日本固有の領土として管理されてきており、尖閣諸島には領土問題は存在していません。</p> <p>ところが、東シナ海に石油が埋蔵されている可能性が指摘され、1970年代になって、中国が尖閣諸島の領有権を主張するようになりました。最近では、中国の船が日本の領海にたびたび侵入してくるため、日本は、中国に厳重に抗議し、領土の保全に取り組んでいます。(p21)</p> <p>【図】北方領土・竹島・尖閣諸島の位置 (p20)</p> <p>【図】日本の領域と排他的経済水域 (p19)</p> <p>【写真】国土の西端 (p18)</p> <p>【写真】尖閣諸島 (p21)</p> <p>【写真】尖閣諸島の日本の領海に侵入する中国の船 (p21)</p> <p>【写真】北方領土・竹島・尖閣諸島などに関する資料を展示する国立の施設「領土・主権展示館」 (p21)</p>	<p>【コラム】沖ノ鳥島を守るために 沖ノ鳥島は、満潮時には二つの小さな島だけが沈まないさんご礁です。この島がなくなると、周辺の約40万km²の排他的経済水域が失われてしまいます。そこで、国が波の浸食から島を守るため護岸工事を行いました。現在も沖ノ鳥島は、国が維持管理をしています。(p19)</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。
「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土の扱いについて、特記すべき事項があれば記載する。

発行者	国旗・国歌について取り上げている項目及び記述の概要	外国の国旗に関する記述の概要
東 書	<p>【本文】国旗に着目 世界の国々には、国の歴史や人々の願いを表した国旗があります。また、デザインや色に共通点がある国旗もみられます。(p13)</p>	<p>【本文】国旗に着目 オセアニア州の国々では、南十字星がえがかれた国旗や、イギリスの国旗であるユニオンジャックの入った国旗が多くみられます。また、アジア州やアフリカ州のムスリムが多い国々には、三日月と星がえがかれた国旗がみられます。これらは、その国々が南半球にある事や、イギリスとの関係、信仰する宗教の象徴を示しています。(p13)</p> <p>【コラム】イギリスの国旗「ユニオンジャック」の由来 イギリスは、正式名称を「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国」といい、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四つの国が連合して成り立っている国です。このことは、ユニオンジャックとよばれるイギリスの国旗の成り立ちを見ても分かります。かつてイギリスの植民地だった国々の中には、ユニオンジャックを自国の国旗の一部にしている国があります。</p> <p>【写真】国際連合本部に掲げられた国旗 (p12) 【図】オセアニア州のさまざまな国旗 (p13) 【図】四つの国の国旗とユニオンジャックの成り立ち (p13) 【図】ムスリムが多い国々の国旗 (p13) 【本文】植民地化の影響 イギリスから独立したオーストラリアやニュージーランド、サモアやフィジーなどは、現在もイギリスとの結び付きを残しており、国旗にイギリスのユニオンジャックが入っていたり、英語が公用語になっていたりします。(p136)</p>
教 出	<p>【本文】国旗は語る 国旗には各国の文化や歴史が織り込まれています。(p14)</p>	<p>【図】世界のさまざまな国旗 (p14) 【本文】国旗は語る イギリスの国旗は「ユニオンジャック」とよばれイングランド、スコットランド、かつてのアイルランドの旗を組み合わせたものです。イギリスの正式な国名は、「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」といいます。現在のイギリスは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの各地域から構成され、例えばサッカーやラグビーの世界大会では各地域から代表が参加します。オセアニア州のオーストラリアやニュージーランド、ツバルなどの国旗の中にも「ユニオンジャック」がみられます。これらの国々はかつてイギリスの植民地であり、イギリスとの歴史的、文化的な関係が深いことがわかります。</p> <p>カナダの国旗にはかつて「ユニオンジャック」が含まれていましたが、1965年にかえでの葉が中央に描かれた現在の国旗に変わりました。南アフリカ共和国では、ヨーロッパ系の人々の支配が終わり、新しい国づくりに合わせて1994年に現在の国旗に変わりました。こうしたさまざまな理由から、国旗のデザインが変わる場合もあります。また、イスラム教徒の多い国では、イスラム教を象徴する緑色を使い、月と星のある国旗がみられます。(p14)</p> <p>【写真】イングランドの旗を掲げてラグビー選手を応援する観客と、スコットランド代表のラグビートームを応援する人 (p14) 【写真】インドとパキスタンの国境の検問所で行われる両国の国旗を降ろす儀式 (p15)</p>
帝 国	<p>【本文】国旗に注目してみた国々 世界の国々には、さまざまな形や色の国旗があります。国旗のデザインには、その国の自然や歴史、宗教などと関係する絵柄が取り入れられていたり、自由や平和といった人々の思いが込められていたりします。(P7)</p>	<p>【本文】国旗に注目して見た国々 オセアニア州では、南半球の夜空に輝く南十字星が描かれていたり、太平洋を象徴する青色が地色となっていたりする国旗が多く見られます。また、「ユニオンジャック」とよばれるイギリスの国旗が、デザインの一部に取り入れられている国々もあります。オセアニアの国々を、国旗に注目して見てみましょう。(P7)</p> <p>【図】オセアニア州の国々の国旗の例 (P7) 【本文】植民地支配のなごり オセアニアには、国旗の中にイギリスの国旗が描かれている国や、現在でもフランス領になっている地域があります。(P122) 【図】オセアニアの国々の国旗 (P122)</p>
日 文	<p>【本文】国旗からみた世界の国々 世界の国々は、それぞれ国旗を定めています。国旗の色、形、図柄(シンボルやデザイン)には、国の歴史や人々の思いがこめられていて、国の象徴として大切にされています。オリンピックの表彰式やサッカーのワールドカップの試合前などには国旗が掲げられます。世界には似た図柄の国旗がたくさんあります。(p7)</p> <p>【コラム】日本の国旗 日本の国旗は、日章旗(日の丸)とよばれます。江戸時代に使われるようになり、長年にわたって日本の国旗として親しまれ、外国からも日本の国旗とされてきました。1999年に、日章旗が日本の国旗であると、法律によって定められました。(p7)</p>	<p>【図】世界の国旗 ユニオンジャックがえがかれている国旗 十字をかたどった国旗 横か縦に2~3色が並んだ国旗 日本と似ている国旗(バン格拉デシュ) 文字が書かれた国旗 四角形でない国旗 三日月と星がえがかれている国旗 (p7)</p> <p>【コラム】国名しりとりでチャレンジ たてに緑・白・緑の3色が並んだ国旗の国 (p9) 【図】イギリスの国旗であるユニオンジャックとオセアニアの国々の国旗 (p123)</p>

発行者	防災や、自然災害時における関係機関の役割等について取り上げている項目及び記述の概要	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
東 書	<p>【コラム】巨大ハリケーンを予測せよ アメリカ合衆国南東部の都市マイアミにはアメリカ国立気象局のハリケーンセンターがあり、最新技術を使って、さまざまなハリケーンの研究や予測が行われています。中でも宇宙に打ち上げた気象衛星からのデータは、ハリケーンの進路や規模を予測するために欠かすことはできません。また、アメリカ海洋大気庁では、「ハリケーンハンター」とよばれる航空機を、ハリケーンの内側に飛ばして、風速や気圧などの観測を行っています。こうしたデータはただちにハリケーンセンターに送られ、ハリケーンの前線などの予測に活用されています。</p> <p>このようにハリケーンの前線の予測の精度が高まったことで、適切な避難指示を出すことができるようになり、激しい暴風雨の被害から人々を守ることができるようになってきています。アメリカ合衆国では気象情報への関心が高く、天気予報を専門に報道しているテレビ局も開設されており、ハリケーンをはじめとするさまざまな気象情報を24時間提供しています。(p117)</p> <p>【資料】地域の自主防災組織の人の話 昭和13年7月、集中豪雨により、死者616人、被害家屋約9万戸にも達する阪神大水害が起きました。川はあふれ、岩やたおれた木が混じった土石流が市街地に流れこみ、周辺は見わたす限りのどろの海となりました。各地に水害の被害を伝えたり、地域の復興を記念したりする伝承碑が建てられています。現在、地域では、防災訓練や防災倉庫の設置など、水害に備える取り組みを行っています。(p153)</p> <p>【写真】災害派遣された自衛隊 (p166) 【写真】被災地に派遣された災害対応車両 (p166) 【写真】津波から避難するための施設 (津波避難タワー) (p166) 【本文】災害の被害を小さくする工夫 国や都道府県・市町村が、洪水や津波を防ぐために海岸や河川に堤防やダムを造ったり、地震による倒壊を防ぐために建物や橋の耐震工事をしたり、水不足を防ぐためにため池を造ったりといった対策をしてきました。その結果、現在は自然災害にあう機会が、昔と比べて大きく減少しました。</p> <p>しかし、すべての自然災害を防ぐことはできません。そこで、さまざまな自然災害の被害を予測したハザードマップを作ったり、気象衛星などの観測技術の向上によって細かい予報を出したりすることで、減災に向けた対策が行われています。(p166)</p> <p>【写真】浸水した住宅の片付けを手伝うボランティア (p167) 【図】災害時の公的機関の活動と支援の動き (p167) 【写真】道路に降り積もった火山灰を掃除する路面清掃車 (p188) 【写真】鹿児島県内で放送されるテレビの予報画面 (p188) 【写真】鹿児島市内にあるシェルター (p189) 【コラム】火山防災の取り組みを世界に発信 桜島は毎日のように噴火をくり返しています。噴火で降ってくる火山灰は雪のようにとけないため、取り除かなければなりません。鹿児島市では、大規模な噴火に備えるため、防災訓練をくり返し行っています。桜島の火山活動を観測し、監視する体制も世界でトップクラスといわれています。こうした取り組みを「鹿児島モデル」として国内外に発信しています。一方、雄大な景色や、各地にわき出る温泉、桜島だいこんなどの農作物は火山がもたらすめぐみであり、多くの観光客をひきつけています。日頃の防災対策がしっかりしているからこそ、安心して観光に訪れることができます。(p189) 【写真】高台移転のための造成工事 (p253) 【図】宮城県東松島市の復興計画 (p253)</p>	<p>【本文】地震や火山による災害 (p164) 【写真】東日本大震災を伝える新聞記事 (p164) 【写真】東北地方太平洋沖地震によって起こった液状化 (p164) 【写真】堤防をこえて市街地に流れこむ津波 (p165) 【本文】災害への対応と支援 (p166) 【コラム】鉄道が支える地域の復興 (p169) 【本文】変化する日本の発電方法 (p172) 【本文】くり返す地震や津波の被害 (p252) 【本文】教訓を伝え、記憶を引きつぐ (p252) 【図】東日本大震災の各地の津波の高さ (p252) 【コラム】長引く原発事故の影響 (p253) 【本文】新しいまちや社会をつくる (p253)</p>	<p>【本文】地震や火山による災害 (p164) 【写真】豪雨により浸水した住宅地 (p165) 【写真】激しく噴火する新燃岳 (p165) 【写真】台風による強風でたおれた鉄柱 (p165) 【コラム】人間の活動と災害の関係 (p165) 【表】さまざまな段階で考えられる防災・減災のための活動例 (p167) 【本文】自助・共助と防災の課題 (p167) 【図】過去にくり返し発生している巨大な地震 (p167) 【コラム】南海トラフ (p167) 【コラム】鉄道が支える地域の復興 (p169) 【本文】火山活動に由来する地形 (p185) 【本文】火山がもたらす大きな被害 (p188) 【本文】風雨の厳しい自然環境 (p188) 【写真】鹿児島市の市街地と噴煙を上げる桜島 (p188) 【コラム】阪神・淡路大震災の教訓 (p215) 【写真】1933年の地震の後に建てられた石碑 (p252) 【図】三陸沖で発生した主な地震 (p252) 【本文】火山と生きる (p260) 【本文】寒さと生きる (p260) 【写真】噴煙をあげる有珠山と洞爺湖温泉 (p261) 【写真】2000年の火山活動で被害を受けた道路 (p261)</p>

「別紙2-8」【 防災や自然災害の扱い 】（中学校 社会 地理的分野）

発行者	防災や、自然災害時における関係機関の役割等について取り上げている項目及び記述の概要	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
教 出	<p>【図】富士市で作成した津波避難マップ (p158) 【本文】災害予測の大切さ 多くの県や市町村では、ハザードマップとよばれる災害時の被害予測を示した地図を作成しています。災害の対象は、洪水や地震、津波、火山災害などです。自然災害の発生は、人の力で完全におさえることはできないため、できる限り被害を減らす減災という考え方にに基づき作成されています。(p158) 【図】被災した地域を支援する公的なしくみ (p158) 【本文】災害への支援と復興 自然災害から身を守るためには、国や都道府県などの防災の取り組みとともに、同じ地域に暮らす人々が進んで助け合うことや、災害時には自分の身は自分自身で守る力を高めていく必要があります。(p159) 【写真】西日本豪雨の被災地で、浴場を無料開放した自衛隊の護衛艦を訪れる人々 (p159) 【コラム】金石市の津波防災教育 中学生が年下の保育園児や小学生を手助けしながら避難する姿を見て、避難行動を始める地域の大人もいたそうです。このことは防災学習によって培われた地域社会や関係機関との連携が、実際の災害発生時に生かせることを物語っています。(p159) 【本文】シラス台地と人々の暮らし シラス台地の崖は、大雨が降ると崩れやすく、土砂災害を引き起こすことがあります。鹿児島県や鹿児島市では、崖ぎわの建築について規制したり、危険な地域にある建物の移転を支援したりして、災害防止に努めています。地域の災害危険度を住民に知らせるハザードマップや防災ガイドブックも作成されています。(p177) 【コラム】震災の経験に学ぶ 1995年に発生した兵庫県南部地震は、大都市に近く、浅い震源で起きたため、最大震度7を記録しました。神戸市では港湾都市の歴史を刻んできた都心部や旧居留地の建物の倒壊、港湾施設や交通路の崩壊、密集地での火災など非常に大きな被害が生まれました。災害から得た教訓を生かし、今後の地震による災害を軽減するため、神戸市の臨海部に「人と防災未来センター」が設立されました。センターは、防災支援の拠点になるとともに、さまざまなかたちで学びの機会を提供しています。(p209) 【コラム】災害に強い都市をみざして 大都市は地面がアスファルトでおおわれ、水が地下にしみ込みにくいいため、集中豪雨などによる水害の危険性が高くなります。そのため、道路の下に巨大な地下調節池などを建設し、豪雨の時に一時的に水を貯め、洪水の被害が出ないように工夫されています。一方、大地震が発生すると電車が止まり、都心で働く多くの人が帰宅できなくなります。そのため、帰宅できなくなった大勢の人たちの居場所や食料を確保する準備など、さまざまな地震対策が進められています。このように、大都市・東京ではハード面だけでなく、ソフト面での防災対策も重要となっています。(p239) 【本文】火山と温泉 過去の噴火で被災した道路などをつなぐ遊歩道を整備し、地元のガイドが観光客を案内しています。火山がそばにある観光地では、地域住民とホテルなどが協力をし、噴火したときに観光客を避難させるための訓練なども行われています。(p273)</p>	<p>【本文】地震と火山 (p156) 【写真】住宅地に押し寄せる津波 (p156) 【本文】災害予測の大切さ (p158) 【本文】簡単ではない電力の問題 (p165) 【写真】東日本大震災直後と、被災約10年後の集落 (p247) 【本文】東北地方の地形 (p248) 【コラム】震災の経験を未来に生かす (p260)</p> <p>【本文】やませを利用する (p256) 【本文】北海道の自然環境 (p264)</p>	<p>【本文】多様な自然環境 (p93) 【コラム】ハリケーン被害と差別 (p101) 【写真】石碑を調査する (p134) 【コラム】石碑に書かれている文章 (p134) 【コラム】災害図上訓練で地域を知る (p141) 【図】洪水ハザードマップ (p141) 【写真】防火のための工夫 (p144) 【写真】噴火する阿蘇山 (p148) 【本文】地震と火山活動が活発な日本 (p148) 【本文】大地の動きが活発な地域 (p148) 【図】世界で起こった主な地震の震源と火山の分布 (p149) 【コラム】日本で地震が多いのはなぜか (p149) 【本文】日本の川 (p152) 【写真】大雨で氾濫した高梁川 (p152) 【本文】梅雨前線と台風 (p155) 【本文】地震と火山 (p156) 【写真】整備された津波避難タワー (p156) 【写真】阪神・淡路大震災で倒壊した高速道路 (p156) 【写真】雲仙岳の火砕流 (p157) 【図】南海トラフ地震の震源を予測した地図 (p157) 【写真】寺田寅彦の像 (p157) 【写真】土砂に押し流された住宅 (p157) 【写真】雪下ろし作業の様子 (p157) 【コラム】川の地形と液状化現象 (p157) 【本文】気象災害 (p157) 【図】有珠山火山防災マップ (p159) <small>【写真】熊本地震の被災地で、日本人とともにカレーをふるまうネパール人のボランティア (p159)</small> 【写真】修復工事が進む熊本城と、耐震補強がなされた城の内部 (p172) 【本文】温暖な気候と台風の通り道 (p175) 【本文】山と海に影響される気候 (p189) 【本文】進む都市化と課題 (p191) 【写真】神戸港震災メモリアルパーク (p202) 【本文】三つの中心都市 (p210) 【本文】東西で異なる気候 (p248)</p>

「別紙2-8」【防災や自然災害の扱い】（中学校 社会 地理的分野）

発行者	防災や、自然災害時における関係機関の役割等について取り上げている項目及び記述の概要	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
帝 国	<p>【コラム】脱炭素で防災力も高める熊本市 2016年の熊本地震で大きな被害を受けた熊本市では、震災の教訓を生かし、持続可能な、災害に強いまちづくりに取り組んでいます。例えば熊本城を中心に周遊するバス「しろめぐりん」に電気自動車（EV）を導入し、災害時には非常用の電源として活用するしくみを整えました。このEVバスは、市内のごみ焼却施設で発電した電気で運行されており、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出ゼロを実現しています。ごみ焼却施設で発電した電気は、市役所や学校などでも利用されているほか、災害時に避難所となる施設のEV充電スタンドにも直接送られています。地域の脱炭素化とともに、災害時にも電気を供給できる体制の構築が進められています。（p171）</p> <p>【コラム】土砂災害に備えた広島県の防災教育 広島県では、2015年から「『みんなで減災』県民総ぐるみ運動」が行われています。県の職員などが小・中学校に赴いて行われる砂防出前講座では、土石流や崖崩れの恐ろしさ、それらを防ぐ砂防えん堤の役割について、模型などを使って学び、日頃から防災意識を高めています。（p187）</p> <p>【コラム】水害からの逃げ遅れをなくす取り組み 長野県では、「逃げ遅れゼロ」プロジェクトとして、各家庭がいつどこに避難するかを確認する「タイムライン」の作成を推進したり、率先して避難する人材を研修で育成したりすることで、住民みずから災害の危険を認識して、適切な避難行動がとれるような取り組みを進めています。（p221）</p> <p>【コラム】全員避難を実現した地域ぐるみの防災教育 全員避難が成功した背景には、1977年の噴火直後から、学校などで徹底した防災教育がなされていたこと、1990年代にはハザードマップがつくられ、それに基づいて避難訓練が繰り返されるなど、地域住民が火山災害の恐ろしさを十分に理解していたことがありました。（p269）</p> <p>【コラム】「人と防災未来センター」で活動する人の話 地震の恐ろしさと、それに対する備えの大切さ、そして救援から復旧・復興までの道のりを語り継ぐことで、防災の意識を高め、減災につなげていきたい。（p287）</p>	<p>【本文】地震と火山災害が多い日本（p146） 【写真】東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）によって発生した津波（p146）</p> <p>【コラム】未来の命を守る「女川いのちの石碑」（p253）</p> <p>【本文】生活に根ざした水産業の営み（p258）</p> <p>【コラム】炭鉱の町から温泉テーマパークの町へ（p261）</p> <p>【コラム】災害からの復興と生活の場の再生（p264）</p>	<p>【コラム】「水の都」ベネツィアが水没する？（p67） 【コラム】大平原で発生する竜巻（トルネード）に備えて（p95）</p> <p>【コラム】地球温暖化による影響と危機（p121）</p> <p>【写真】熊本地震で被害を受けた熊本城の石垣（p146）</p> <p>【図】主な火山と地震の震央（p146）</p> <p>【写真】北海道胆振東部地震で生じた液状化（p146）</p> <p>【写真】噴火する霧島山（p147）</p> <p>【図】火山の恵みと火山災害（p147）</p> <p>【図】さまざまな気象災害（p147）</p> <p>【写真】大雨による浸水被害（p147）</p> <p>【写真】大雪で動けなくなった自動車（p147）</p> <p>【本文】様々な気象災害（p147）</p> <p>【本文】温暖で多雨な気候と自然災害（p171）</p> <p>【本文】火山の噴火への備え（p172）</p> <p>【本文】南西諸島の自然と生活（p178）</p> <p>【本文】三つの海と地域で異なる気候（p187）</p> <p>【コラム】高潮や津波に備える水の都、大阪（p203）</p> <p>【本文】三つの地域で異なる気候（p221）</p> <p>【コラム】都市型の水害に備える取り組み（p237）</p> <p>【本文】米づくりと寒い夏の克服（p256）</p> <p>【コラム】災害からの復興と生活の場の再生（p264）</p> <p>【本文】雪に備える生活の工夫（p271）</p> <p>【資料】神戸市の魅力を伝える旅行プランを考えた例（p292）</p>

「別紙2-8」【防災や自然災害の扱い】(中学校 社会 地理的分野)

発行者	防災や、自然災害時における関係機関の役割等について取り上げている項目及び記述の概要	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
日 文	<p>【本文】防災・減災へのくふう 国・県・市町村などの機関、自主防災組織などの住民組織、家庭・個人が一体となって、被害をできるだけ小さくする減災に取り組んでいく必要があります。(p152)</p> <p>【本文】どのように災害と向き合うか 大きな災害が発生したときには、国・県・市町村や消防・警察・海上保安庁・自衛隊などが被災者に対する救助活動を行ったり、さまざまな情報を提供したり、避難所を開設したりするなどの活動を行います。(p152)</p> <p>【写真】避難所を示す看板 (p152)</p> <p>【写真】避難所のようす (p152)</p> <p>【写真】中学校で行われる避難訓練 (p152)</p> <p>【写真】自衛隊の救助活動 (p152)</p> <p>【図】災害発生時の公的な支援のしくみ (p153)</p> <p>【表】発表される防災情報の例 (p153)</p> <p>【写真】桜島の噴火にそなえた防災訓練 (p177)</p>	<p>【本文】地震・火山による災害 (p150)</p> <p>【写真】東日本大震災で沿岸部をおそった津波 (p150)</p> <p>【本文】日本の電力を支える中部地方 (p229)</p> <p>【写真】陸前高田市の中心部の復興 (p250)</p> <p>【本文】南北に延びる山地と平地 (p252)</p> <p>【コラム】くしの歯作戦 (p254)</p> <p>【コラム】「復興道路」の開通 (p254)</p> <p>【本文】震災がもたらした急激な人口の変化 (p260)</p> <p>【本文】震災で大きな影響を受けた農業・漁業 (p260)</p> <p>【グラフ】福島県産の農産物の輸出量 (p260)</p> <p>【本文】震災で世界にまで影響が及んだ工業 (p261)</p> <p>【グラフ】震災前後の日本の自動車工業の輸出額 (p261)</p> <p>【写真】震災遺構として保存される旧野蒜駅 (p262)</p> <p>【本文】震災を伝承していく取り組み (p262)</p> <p>【本文】災害に強い地域づくりをめざして (p263)</p> <p>【コラム】新しいまち「野蒜ヶ丘」 (p263)</p> <p>【写真】いのちの石碑プロジェクト (p263)</p> <p>【写真】震災前の景観を再現した模型を見ながら説明する元住民 (p263)</p>	<p>【本文】北アメリカの多様な地形と気候 (p92)</p> <p>【本文】背骨のようにつらなる山地 (p146)</p> <p>【本文】山と川がつくる多様な地形 (p146)</p> <p>【コラム】日本をとりまく海 (p147)</p> <p>【本文】地震・火山による災害 (p150)</p> <p>【写真】阪神・淡路大震災で倒壊した高速道路 (p150)</p> <p>【図】日本周辺の主な地震災害と火山 (p150)</p> <p>【本文】さまざまな気象災害 (p151)</p> <p>【本文】自然災害からみた日本の地域区分 (p151)</p> <p>【写真】新燃岳の噴火 (p151)</p> <p>【写真】洪水のようす (p151)</p> <p>【写真】少雨によって干上がったダム (p151)</p> <p>【写真】大雪で動けなくなった自動車 (p151)</p> <p>【写真】建物の耐震工事 (p152)</p> <p>【写真】非常用持ち出し袋の例 (p152)</p> <p>【図】日常生活のなかで行う防災対策の例 (p153)</p> <p>【図】南海トラフで起こる巨大地震の想定震源域 (p154)</p> <p>【写真】津波避難タワー (p154)</p> <p>【写真】熊本城と熊本市の市街地 (p171)</p> <p>【本文】火山が多い地形 (p172)</p> <p>【本文】温暖で雨の多い気候 (p173)</p> <p>【本文】火山と人々の生活 (p176)</p> <p>【本文】気候と人々の生活 (p176)</p> <p>【写真】地下につくられた雨水トンネル (p177)</p> <p>【写真】沖縄の伝統的な住居と台風へのそなえ (p177)</p> <p>【本文】三つの地域で異なる気候 (p204)</p> <p>【本文】世界への窓口となった神戸 (p211)</p> <p>【コラム】水とつき合う地域の知恵 (p221)</p> <p>【本文】防災面での課題への取り組み (p246)</p> <p>【本文】都市機能を分散させる取り組み (p247)</p> <p>【写真】としまみどりの防災公園を走る電気バス (p247)</p> <p>【写真】地下調節池 (p247)</p> <p>【本文】東北地方の農業 (p256)</p> <p>【写真】1933年の津波後に建てられた石碑 (p262)</p> <p>【本文】自然環境と観光の共生 (p279)</p>

発行者	脱炭素化に関する扱いと記述の概要
東書	<p>【本文】国を超えた国境への取り組み 地球温暖化の原因になる、温室効果ガスの排出をなくす脱炭素社会を実現するために、EU加盟国では、火力や原子力にかわる、風力や太陽光などの再生可能エネルギーを利用した発電も積極的に進められています。(p84)</p> <p>【コラム】バイオエタノール さとうきびやとうもろこしなどの植物を原料としてつくられるアルコール燃料です。植物は大気中の二酸化炭素を吸収して成長するので、燃やしても大気中の二酸化炭素は計算上は増えないため、地球温暖化への対策として注目されています。(p125)</p> <p>【コラム】バイオエタノールは夢の燃料？ 植物を原料とするバイオエタノールは、燃やしても、全体としての大気中の二酸化炭素は増加しないため、環境に優しいエネルギーとされています。(p125)</p> <p>【本文】豊富な鉱山資源 地球温暖化を食い止めるために脱炭素社会への転換が進む中で、石炭の輸出にたよった経済は変化が求められています。(p135)</p>

発行者	脱炭素化に関する扱いと記述の概要
教 出	<p>【本文】 環境問題への関心の高まり ヨーロッパでは環境問題に対する関心が高く、地球温暖化が進むとともに二酸化炭素（CO₂）などの温室効果ガスを減らす対策がとられてきました。（p72）</p> <p>【本文】 再生可能エネルギーへの期待 ヨーロッパでは、CO₂の排出をおさえるために、風力、太陽光、バイオマス、地熱などの再生可能エネルギーによる発電の導入が進められています。（p73）</p> <p>【本文】 簡単ではない電力の問題 水力発電所や原子力発電所の立地場所は、電力消費の多い大都市から離れた地域です。また、火力発電には地球温暖化の原因でもある二酸化炭素を排出するという問題もあります。日本の電力のあり方については、皆で考えなければならない課題です。（p165）</p>

発行者	脱炭素化に関する扱いと記述の概要
帝 国	<p>【本文】都市の発展と残された課題 大気汚染の原因物質や、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を減らす取り組みが見られるようになりました。（p53）</p> <p>【本文】大量消費社会の課題 アメリカ合衆国は世界で最もガソリン消費量が多い国でもあります。ガソリンの消費が増えると、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量が増加し、地球温暖化が進むと考えられています。（p103）</p> <p>【コラム】脱炭素社会に向かうヨーロッパ ヨーロッパでは、脱炭素社会に向けた取り組みが数多く見られます。再生可能エネルギーの導入をはじめ、環境への負荷が小さい鉄道の利用促進、電気自動車の普及に向けた充電スタンドの設置などがみられます。</p> <p>2018年ごろからは、ヨーロッパの各地で、多くの人に参加し、政府に対して気候変動への対策を訴えかける運動も活発になっています。脱炭素社会の実現のためには、それを支える技術革新やしくみづくりとともに、個人がもつ意識の変化も重要となってきます。（p75）</p> <p>【本文】持続可能な社会に向けて 地球温暖化の対策として、日本は再生可能エネルギーの活用とともに、省エネルギーの技術を生かした環境対策の実施など脱炭素社会に向けた取り組みを進めています。（p156）</p> <p>【コラム】地球温暖化への対策～脱炭素社会の実現に向けて 今後、二酸化炭素の排出量が現在の約2倍になった場合、2100年には、世界の平均気温が産業革命前よりも2.8～4.6℃上昇すると予測されています。2015年に採択された国際的な取り決めであるパリ協定では、産業革命前からの気温上昇を1.5℃までに抑えることが目標とされました。その目標の達成のためには、温室効果ガスの排出量を減らすことが必要です。</p> <p>脱炭素とは、温室効果ガスの排出量をゼロにする取り組みのことで、それが実現された社会が脱炭素社会です。しかし、温室効果ガスの排出量をゼロにすることは現実的ではありません。そこで、温室効果ガスの排出量と植物などによる吸収量の総和をゼロにするカーボンニュートラルが目指されています。日本は、2050年までにカーボンニュートラルを達成するという目標を掲げています。（p157）</p> <p>【コラム】脱炭素で防災力も高める熊本市 2016年の熊本地震で大きな被害を受けた熊本市では、震災の教訓を生かし、持続可能な、災害に強いまちづくりに取り組んでいます。例えば、熊本城を中心に周遊するバス「しろめぐりん」に電気自動車（EV）を導入し、災害時には非常用の電源として活用するしくみを整えました。このEVバスは、市内のごみ焼却施設で発電した電気で運行されており、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出ゼロを実現しています。ごみ焼却施設で発電した電気は、市役所や学校などでも利用されているほか、災害時に避難所となる施設のEV充電スタンドにも直接送られています。地域の脱炭素化とともに、災害時にも電気を供給できる体制の構築が進められています。（p171）</p> <p>【コラム】公共交通を活用したまちづくり 栃木県宇都宮市は人口50万を超える都市です（2022年）。人口が増えるにしたがって郊外にも住宅地が広がり、市民の多くは自家用車で市内を移動するようになりました。しかし、近年は少子高齢化が進み、人口が減少し始めました。</p> <p>そこで宇都宮市は、魅力的な町であり続けるために、公共交通のネットワークを活用したコンパクトシティの取り組みを進めています。コンパクトシティとは、住宅と商業施設や公共施設などが、まとまっていたり、公共交通で移動しやすかったりする効率的な都市のことです。</p> <p>宇都宮市では、2023年に中心市街地と郊外にある住宅地や工業団地などを結ぶ次世代型路面電車システム（LRT）が開通する予定です。LRTは、バスよりも乗車できる人数が多く、運行時刻が正確なため、地域間の移動が便利になり、人の往来が活発になると期待されています。また、このLRTは再生可能エネルギーによる電力で走り、自動車のように二酸化炭素などの温室効果ガスを排出しないため、脱炭素社会の実現も期待されています。（p248）</p> <p>【学習課題】 日本は、年間で10億tを超える二酸化炭素を排出しており、その4割が発電などのエネルギー転換部門から排出されています（2020年度）。ここでは、脱炭素社会の実現に向けて、地域の自然環境を生かしながら、どのような再生可能エネルギーを使った発電を増やしていくとよいか、考えよう。（p281）</p>

発行者	脱炭素化に関する扱いと記述の概要
日 文	<p>【巻頭1】カーボンニュートラルの実現に向けて 世界では、人々の活動によって排出される二酸化炭素の量と、植林などによって吸収される二酸化炭素の量を同じにする「カーボンニュートラル」をめざす取り組みが進められています。(巻頭1)</p> <p>【導入】さまざまな地球的課題 地球的課題とはどのようなものなのでしょうか。地理的分野の学習のはじめに「持続可能な社会と私たち」について学びました。持続可能な開発目標 (SDGs)、カーボンニュートラル、技術革新によって解決を目指す課題などは、人類全体で解決に取り組まなければならない地球的課題といえます。(p45)</p> <p>地球温暖化を防ぐために、世界各国は温室効果ガスの排出量の削減に取り組んでいます。カーボンニュートラルの取り組みもその一つです。また、南アメリカ州では、二酸化炭素を大量に吸収する熱帯雨林の保全が求められています。(p45)</p> <p>【グラフ】ヨーロッパ各国と日本の主な環境に悪影響を及ぼす物質への課税 (炭素税・国境調整措置を巡る最近の動向) (p73)</p> <p>【コラム】新しい技術や製品と人々の生活 電気自動車は、ガソリン車とは異なり、走行中に地球温暖化の原因の一つとされる二酸化炭素を排出しません。(p94)</p> <p>【コラム】ブラジルの環境保全の取り組み ブラジルは、地球温暖化の原因の一つとされる二酸化炭素の排出量を実質的にゼロにするカーボンニュートラル政策を進めています。排出量を抑制するためには、アマゾン川流域で急速に進んでいる熱帯雨林の開発をおさえる必要があるとされています。(p110)</p> <p>【図】バイオ燃料と二酸化炭素 原料の農産物が二酸化炭素を吸収する量が排出量よりも多ければ、大気中の二酸化炭素は増加しません (カーボンニュートラル)。(p115)</p> <p>【本文】環境問題への取り組み 日本は、世界有数のエネルギー消費国です。主なエネルギー源は石油・石炭・天然ガスですが、燃やすときに地球温暖化の原因の一つとなる二酸化炭素を大量に排出します。また、自給率がほぼ0%ということもあり、これらに代わるエネルギー源の確保が大きな課題となっています。(p159)</p> <p>【コラム】再生可能エネルギーと脱炭素社会 日本は、2050年までに二酸化炭素の排出量を実質的にゼロにするカーボンニュートラルの実現をめざしています。そのためには、エネルギー源として鉱山資源に依存した社会のしくみを見直す必要があります。そこで、二酸化炭素の排出量が多い火力発電に代わって、水力、太陽光、風力、地熱、バイオマスなどの再生可能エネルギーが注目されています。(p159)</p> <p>【本文】自動車工業の課題 地球温暖化の原因となる二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を削減し、カーボンニュートラルを実現することが求められています。そこで、電気自動車など環境への負担の少ない技術の開発・向上をはかることで、競争力を維持することをめざしています。(p225)</p>

発行者	持続可能な社会づくりについて取り上げている項目	
東 書	<p>【写真】地熱発電所となり合う露天風呂 (巻頭3)</p> <p>【写真】米作りの研修を受ける難民 (巻頭3)</p> <p>【写真】世界遺産の白川郷を撮影する人々 (巻頭3)</p> <p>【写真】泥を運び出すボランティア (p1)</p> <p>【写真】自動運転のバスに乗車する人々 (p1)</p> <p>【本文】持続可能な都市づくり (p73)</p> <p>【本文】国をこえた環境への取り組み (p84)</p> <p>【本文】発展のための取り組み (p99)</p> <p>【振り返り】「地球的課題をふり返ろう」 (p143)</p> <p>【写真】浸水した住宅の片付けを手伝うボランティア (p167)</p>	<p>【本文】水俣市の取り組み (p193)</p> <p>【コラム】「結」で守る景観 (p227)</p> <p>【本文】地域の発展と環境との両立 (p265)</p> <p>【図】SDGsをふり返ろう (p271)</p>
教 出	<p>【写真】スラムと高層ビル群 (p45)</p> <p>【写真】女性のための学校 (p45)</p> <p>【写真】軍事境界線で握手する韓国・北朝鮮の代表 (p45)</p> <p>【写真】解禁された女性の自動車運転 (p45)</p> <p>【写真】建築工事現場で働く外国人労働者 (p45)</p> <p>【写真】駅の行先表示板に見る、国境を超える列車 (p63)</p> <p>【写真】緑化された線路を走る路面電車 (p63)</p> <p>【写真】海上の風力発電施設 (p63)</p> <p>【写真】自転車専用レーンを走る人 (p63)</p> <p>【グラフ】デンマークのエネルギー源別の発電割合 (p63)</p> <p>【グラフ】コペンハーゲン市内の通勤・通学の交通手段 (p63)</p> <p>【コラム】ヨーロッパがアフリカに残したものは (p78)</p> <p>【図】アフリカのハンガーマップ (p81)</p> <p>【写真】援助食糧を配布するために運ぶ人々 (p81)</p> <p>【グラフ】世界の人口に占める地域別構成比率の移り変わり (p81)</p> <p>【写真】大人数で生活する家族 (p81)</p> <p>【写真】路上でフランスパンを売る人 (p81)</p> <p>【写真】様々な民族が学ぶ中学校 (p91)</p>	<p>【写真】市民権宣誓式に出席する人々 (p91)</p> <p>【写真】カラジャス鉄山の採掘場と大規模なコーヒー農園 (p105)</p> <p>【写真】リオデジャネイロの高層ビルとスラム地区 (p105)</p> <p>【写真】アマゾン盆地を曲がりくねって流れるアマゾン川と密林 (p105)</p> <p>【コラム】多民族の共存の問題 (p117)</p> <p>【コラム】国境を越えて移動する人々 (p126)</p> <p>【本文】利用できる資源 (p164)</p> <p>【本文】簡単でない電力の問題 (p165)</p> <p>【本文】電力に関する新たな動き (p165)</p> <p>【コラム】シラスを生かした環境対策 (p177)</p> <p>【本文】上勝町の「つまもの」ビジネス (p195)</p> <p>【コラム】「住み続けられる」地域づくり (p200)</p> <p>【コラム】モノから見えてくる地域 (p230)</p> <p>【コラム】震災の経験を未来に生かす (p260)</p> <p>【コラム】アイヌ民族の文化に学ぶ (p276)</p>

発行者	持続可能な社会づくりについて取り上げている項目		
帝 国	<p>【巻頭1, 2】 これからの社会に向けて</p> <p>【本文】 人口の集中と経済発展 (p51)</p> <p>【本文】 経済発展によるインドの課題 (p59)</p> <p>【本文】 多様な文化が共存する社会 (p69)</p> <p>【本文】 環境に配慮した産業発展を目指して (p75)</p> <p>【本文】 EU域内の経済格差 (p76)</p> <p>【コラム】 ヨーロッパとの結びつきからみたロシア (p77)</p> <p>【本文】 発展に向けた取り組み (p87)</p> <p>【資料】 課題解決に向けた取り組みやSDGsとの関連 (p91)</p> <p>【本文】 持続可能な社会の実現のために (p103)</p> <p>【本文】 日本を取り巻く海 (p143)</p> <p>【写真】 熊本地震で被害を受けた熊本城の石垣 (p146)</p> <p>【図】 主な火山と地震の震央 (p146)</p> <p>【写真】 北海道胆振東部地震で生じた液状化 (p146)</p>	<p>【本文】 地震と火山災害が多い日本 (p146)</p> <p>【写真】 東北地方太平洋沖地震によって発生した津波 (p146)</p> <p>【写真】 津波避難タワー (p148)</p> <p>【図】 南海トラフの巨大地震で想定される津波の高さ (p148)</p> <p>【本文】 防災・減災の取り組み (p148)</p> <p>【本文】 持続可能な社会に向けて (p155)</p> <p>【本文】 変化する日本の産業 (p160)</p> <p>【コラム】 公害の街から生まれ変わった水俣市 (p177)</p> <p>【コラム】 自然環境の再生から資源循環型社会へ (p182)</p> <p>【コラム】 通信網を生かした地域おこしの取り組み (p198)</p> <p>【コラム】 環境につちかわれた産業の発展のために (p216)</p> <p>【コラム】 時代の変化に対応する産業の創出 (p232)</p> <p>【コラム】 公共交通を活用したまちづくり (p248)</p> <p>【コラム】 未来の命を守る「女川いのちの石碑」 (p253)</p>	<p>【コラム】 災害からの復興と生活の場の再生 (p264)</p> <p>【コラム】 多様な文化を大切にする取り組み (p280)</p> <p>【資料】 これまでの学習と「地域のあり方」の関係 (p283)</p> <p>【本文】 さまざまな課題を振り返ろう (p284)</p> <p>【本文】 持続可能な社会を目指す一員として (p293)</p>
日 文	<p>【写真】 平和記念式典 (巻頭1)</p> <p>【写真】 太陽光パネルが設置された電気自動車の充電施設 (巻頭1)</p> <p>【写真】 植樹活動をする人々 (巻頭1)</p> <p>【写真】 トルコからの支援でつくられた水道を使う子どもたち (巻頭2)</p> <p>【写真】 いちごの色をAIで判別して収穫するロボットの研究・開発 (巻頭2)</p> <p>【写真】 ドローンによる山間部への配達の実証実験 (巻頭2)</p> <p>【コラム】 未来都市シェンチェンの発展 (p50)</p> <p>【コラム】 アジアの課題をどう解決する? (p61)</p> <p>【コラム】 SDGsで世界をリードするヨーロッパ (p66)</p> <p>【本文】 持続可能な社会をめざして (p72)</p> <p>【コラム】 持続可能な農業・焼畑農業 (p81)</p> <p>【コラム】 アフリカの豊かな資源がもつ可能性 (p82)</p> <p>【コラム】 広がるフェアトレード (p85)</p> <p>【コラム】 自立のための取り組みの優先順位をグループで話し合おう (p89)</p> <p>【コラム】 アメリカと世界の未来 (p94)</p> <p>【本文】 大量生産・大量消費の生活から持続可能な社会へ (p102)</p> <p>【コラム】 ICTで交通問題を解決 (p103)</p> <p>【コラム】 大量生産・大量消費の生活を維持する?しない? (p105)</p> <p>【コラム】 熱帯雨林の豊かな自然環境と経済発展 (p110)</p> <p>【コラム】 持続可能な農業をめざして (p115)</p> <p>【コラム】 ニュージーランドにみる多文化社会 (p122)</p> <p>【コラム】 性的少数者に配慮した社会へ (p125)</p> <p>【コラム】 あなたの考える多文化社会って? (p129)</p> <p>【コラム】 せまりくる巨大地震に備えて (p154)</p> <p>【コラム】 ハザードマップを活用しよう (p155)</p> <p>【コラム】 再生可能エネルギーと脱炭素社会 (p159)</p>	<p>【コラム】 交通・通信からみる新型コロナウイルス感染症 (p164)</p> <p>【コラム】 世界自然遺産に登録された屋久島 (p173)</p> <p>【コラム】 プロスポーツのキャンプが地域に与える影響 (p174)</p> <p>【コラム】 生まれ変わった水俣市 (p183)</p> <p>【コラム】 環境保全と観光業を両立させよう (p185)</p> <p>【コラム】 橋の開通に未来を「かける」 (p190)</p> <p>【本文】 産地間の競争とブランド化の取り組み (p197)</p> <p>【コラム】 四国新幹線の整備について考えよう (p201)</p> <p>【コラム】 歴史を大切に近畿地方の地域づくり (p206)</p> <p>【コラム】 琵琶湖の環境を未来の世代へ (p209)</p> <p>【コラム】 林業の歴史と未来 (p215)</p> <p>【コラム】 ニュータウンの課題と再生をめざす取り組み (p238)</p> <p>【コラム】 多文化共生社会をめざして (p245)</p> <p>【コラム】 東北地方の風力発電 (p253)</p> <p>【コラム】 復興の先をみすえて (p254)</p> <p>【コラム】 新しいまち「野蒜ヶ丘」 (p263)</p> <p>【コラム】 未来をみすえた農業・漁業の取り組み (p270)</p> <p>【コラム】 十勝平野の地域循環農業の取り組み (p275)</p> <p>【コラム】 とる漁業から育てる漁業へ (p279)</p> <p>【コラム】 持続可能な地域の在り方を考えよう (p281)</p> <p>【本文】 持続可能な社会づくりを意識する (p284)</p>	

発行者	障害者理解に関する扱いについて取り上げている記述の概要
東書	記載なし
教出	記載なし
帝国	記載なし
日文	【本文】 ニュージーランドにみる多文化社会 聞こえの不自由な人への行政サービスが十分に保障されていないとして、手話を公用語にすることが求められました。その結果、2006年に手話が公用語に加わりました。公用語となったことで、マオリ語や手話で教育などの行政サービスを受けることができるようになりました。(p122)

発行者	オリンピック・パラリンピックについて取り上げている項目及び記述の概要
東 書	<p>【写真】廃棄された家電から取り出した金 「都市鉱山」ともよばれる廃棄されたパソコンやテレビといった家電製品などから金属を取り出す技術を生かし、北九州市にある企業では金メダルの作成にも協力しました。(p193)</p> <p>【本文】世界都市・東京 2021年には、夏季オリンピック・パラリンピックが東京で開催されました。(p237)</p>
教 出	<p>【本文】人口集中による都市問題 2016年にオリンピックを開催したりオデジャネイロをはじめとする大都市での開発が進められてきました。(p113)</p> <p>【資料】オリンピックはどこで開かれるのだろう (p127)</p> <p>【コラム】東京湾の臨海部の再開発 2018年に卸売市場が築地から豊洲へ移転したほか、東京オリンピック・パラリンピックのための多くの競技会場や選手村も臨海部に建設されました。臨海部は再開発によって大きく変わりつつあります。(p237)</p>
帝 国	<p>【コラム】ヨーロッパとの結びつきからみたロシア 寒い気候を生かしたスポーツが盛んであり、オリンピックをはじめ、様々な世界大会が開かれてきました。(p77)</p> <p>【コラム】再利用可能な資源が眠る都市鉱山 パソコンやスマートフォンなどの電子機器には、金やレアメタルなどの再利用可能な資源が含まれています。資源を含んだこれらの電子機器の廃棄物は、人口が集中する都市に多く存在するため、「都市鉱山」とよばれています。 都市鉱山に眠る金属を回収して活用できれば、輸入に頼っている貴重な資源を国内で循環できる可能性もあります。2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックでは、都市鉱山からつくられたメダルが授与されました。(p155)</p>
日 文	<p>【本文】国旗からみた世界の国々 世界の国々は、それぞれ国旗を定めています。国旗の色、形、図柄（シンボルやデザイン）には、国の歴史や人々の思いがこめられていて、国の象徴として大切にされています。オリンピックの表彰式やサッカーのワールドカップの試合前などには国旗が掲げられます。(p7)</p> <p>【本文】札幌市の発展 1972年には、アジアで初めて冬季オリンピックが開催されました。当時の施設のなかには、現在でも利用されているものもあります。(p273)</p>

発行者	固定的な性別役割分担意識に関する記述等
東書	記載なし
教出	【本文】日本が進む少子高齢化と人口減少女性の社会進出が進む中で問題となっている乳幼児の保育施設の不足を解消することや、働き過ぎをなくし、仕事と生活の調和の実現を図ることが社会的な課題となっています。（p160）
帝国	記載なし
日文	記載なし

項 目	ア 冊子の構成	イ 学習過程	ウ 学習活動	エ 「主体的・対話的で深い学び」 の実現に向けた工夫	オ ユニバーサルデザインの視点	カ デジタルコンテンツの扱い
東書	・全体を「世界と日本の地域構成」「世界のさまざまな地域」「日本のさまざまな地域」の三編で構成している。	・単元のはじめに、単元を貫く「探究課題」を設定している。 ・1単位時間の授業に「学習課題」「チェック」「トライ」の学習プロセスを配置し、生徒が課題解決的な学習に取り組むようにしている。 ・単元のまとめとして、「まとめの活動」や「探究課題の解決」が設定されている。	・1単位時間の授業ごとの追及課題を「学習課題」のマークで示している。 ・見方・考え方の視点となる箇所をマークすることで明確にしている。 ・学習したことを活用し、自分で考え、言葉で表現する視点を「トライ」のマークで示している。	・対話を通して深い学びを実現するための活動例を、「みんなでチャレンジ」として導入や本文、まとめのページに配置している。	・資料の掲載部分を、文字などの読み取りに支障のない地色を敷いて区別することで、紙面の構造を明確化してある。 ・ユニバーサルデザインフォントを使用することで、文字の視認性を向上させている。	・二次元コードで、スキル・アップの開設動画やNHK for School動画などが閲覧できたり、操作を通して理解を促したりするコンテンツの活用ができる。
教出	・全体を「世界と日本の地域構成」「世界のさまざまな地域」「日本のさまざまな地域」の三編で構成している。	・章のはじめに、写真資料を中心に構成することで生徒が興味・関心や見通しをもてるようにしている。 ・「学習課題」で毎時間の学習を見通せるようにしている。 ・章の最後には、振り返り整理・考察ができるよう「学習したことを活用してまとめよう」のコーナーが設定されている。	・1単位時間の授業ごとの追及課題を「学習課題」のマークで示している。 ・学習したことを確認し整理する視点を「確認！」のマークで示している。 ・学習したことを活用し、自分で考え、言葉で表現する視点を「表現！」のマークで示している。	・各章の「学習のまとめと表現」に、グループでの対話的な活動を想定した多様な問いを示している。 ・各章のとびらに、その章で働かせるべき「見方・考え方」をマークを付けて提示し、深い学びが促されるようにしている。	・視覚効果が高い幅広い判型を用いて、鮮明な写真や文字で生徒が見やすい紙面構成となっている。 ・強力な接着剤を用いた堅牢な製本で、長期間の使用に耐えられるつくりとなっている。	・紙面に印刷された二次元コードから、動画やクイズ、統計資料など各種のコンテンツにアクセスして、学習に活用することができる。
帝国	・全体を「世界と日本の地域構成」「世界のさまざまな地域」「日本のさまざまな地域」の三編で構成している。	・章のはじめに、写真資料を中心に構成することで生徒が興味・関心や見通しをもてるようにしている。 ・「学習課題」で毎時間の学習を見通せるようにしている。 ・章の最後には、振り返り整理・考察ができるよう「学習を振り返ろう」のコーナーが設定されている。	・1単位時間の授業ごとの追及課題を「学習課題」のマークで示している。 ・学習したことを確認し整理する視点を「確認しよう」のマークで示している。 ・学習したことを活用し、自分で考え、言葉で表現する視点を「説明しよう」のマークで示している。	・「写真で眺める」を活用し、学習の見通しを立てて学びを進めていくことで主体的な学びを実現できるようにしている。 ・「学習を振り返ろう」を活用し、思考ツールや話し合い活動を通して対話的な学びや深い学びを実現できるようにしている。	・図版に背景色や囲み線をつけるなどして図版と本文を区別しやすくしている。 ・読みやすくする工夫として、文字は、ユニバーサルデザインフォントを採用し、重要語句を示すゴシック体の太さやルビへの配慮がされている。	・二次元コードの利用で、教科書の学習内容とリンクした「見直しスライド」「図解アニメーション」や、「学習を振り返ろう」「アクティブ地理」のワークシートなどの活用ができるようになっていく。
日文	・全体を「世界と日本の地域構成」「世界のさまざまな地域」「日本のさまざまな地域」の三編で構成している。	・編・章の初めに「学習のはじめに」を設定し活動を通して問いを立てたり、学習を見通したりできるようにしている。 ・編・章・節の最後には、「まとめと振り返り」を設定し、学習課題を踏まえた問いに取り組む活動が行えるようになっていく。	・「学習課題」で本文のページで何を学んでいくのかを示している。 ・学習課題の解決に向けて手がかりになる主な「見方・考え方」の例を示している。 ・学習課題に対応し、本文のページの学習を確かめるための問いとして「確認」「表現」として、問いを示している。	・「資料活用」や「議論してみよう」などの学習活動のうち、生徒どうしの話合いなど対話的な活動が効果的に取り入れられるものについて「学び合い」マークを示している。	・カラーユニバーサルデザインの観点から、グラフなどの情報を負担なく読み取ることができるように工夫している。 ・見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用している。	・二次元コードで学習の意欲を高めるイントロダクションムービーや、単元のまとまりで振り返りができるポートフォリオなどが活用できる。